
疎遠にかは生きることにした

練炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

畠辺るにかは生きることにした

【著者名】

練炭

【あらすじ】

とある少女は青年と出会った。とある畠辺るにかはとある霧江五樹と出会った。それが始まり。それが終わり。何気無い対話から端を発した些細な現象は、次第に宇宙を呑み込む揺らぎへと振動していく。次第に自分の周りが何もかも巻き込まれていく中で、青年は何を思うのか。収束に向かって加速していく世界で生きたり死んだりする人々の物語。

その1 独房

独房 11／10 火曜

「君は毎日一人で帰っているね」

大学を出て数分経つたところで、ぼくはその声によつて歩を止めた。

振り返ると、見慣れない制服を着た女の子がいた。
真つ黒の髪。身長ほどある髪。前髪は眉の下辺りで切り揃えられている。

「……ぼくの隣に友人らしき人間が見えるのか？」

「結構な言い分だ」

わけが分からぬ。

火曜日の午後四時五十分。

空は半分ほど雲が覆われていた。

「退屈だつたからね。つい声をかけてしまつたんだ。もしかして急ぎかい？ ならば無理に引き止めようとはしないのだが」

「引きとめるための第一声がそれとは、君は第一印象とか気にしない人なのかな？」

「ふむ、ならば君は第一印象だけで人の全てを決めてしまつようない人なのかな」

「そこまでは言つていない」

「しかし私にはそう聞こえてしまつた」

なかなかへ理屈をこねる娘である。

ぼくが顔を歪ませると、女の子は対照的に顔を綻ばせた。

「だが、私にとつての君の第一印象はまずまずだ。悪くない」

「何様だ」

「お子様」

「…………」

今更そんな言い回し、小学生でも使わないぞ。

見た目確かに中学生から高校生といったところだろうか。ギリギリお子様と言われても頷けないことはない。

「ところで私の趣味は気分が沈んでそうな人間に声をかけることだ」「……嫌がらせが趣味なのか？」

「いやいやとんでもない。自分が嫌なことは他人にはしない、って親か先生に教わらなかつたのかな？」

「…………なるほど」

女の子はそう言つぼくの顔を見ると、笑つた。

それは、笑みだった。

目を薄く閉じて、口の端を若干吊り上げて。

田向ほひしで氣持ちよがわしきて眠る猫のよひ。

「君はいつも退屈してそうな顔をしてる。」
「……いつ君はいつも疑問を抱えてそうな顔をしてる」

「素晴らしい。まるで小さな旋律のよつだ」

不思議な雰囲気を纏う女の子。

制服を着ているから、少なくとも大学生ではないだろう。

「いつしている間にも疑問は増え続けていく。他の人間は何をして
いるんだろう、と俄に思い立つ。世界は広がりを持っているが、人
間は収斂に向けてしか存在たりえない」

女の子は演説するよつにして口を動かし続ける。

「気になるかい？」

「……何がだ？」

だがぼくの疑問を余所に、女の子は「ならば」と告げて、

「すぐにまた会おう

女の子は、踵を返して路地へと消えた。
ぼくは追い掛けなかつた。

女の子は言つた。

「すぐにまた会おう」と。

ならばすぐにまた会うのだろう。

まくは立ち止まる前と同じ歩調で坂道を下り始めた。

その2 灰色

灰色 11／11 水曜

ふとそんな気がしたので、振り返ると昨日の女の子が立っていた。

「おや、まだ声を掛けた覚えはないのだけれど」

「そんな気がしたからだよ」

女の子は少し思案する仕草を見せた。

「そんな気がしたから……うん、悪くない答えた。シンプルでいて明瞭。納得に足る答えた」

女の子は数回頷いた。

今日は晴れている。青い秋空が寒々しい。日が落ちるまでは、まだ時間がある。

「今日もやはり君は楽しくなさそうな顔をしているね。明日にでも地球が滅ばないかと考えてこよつだよ」

「それは違うね」ぼくは反論した。「今この瞬間にでも滅んでしまえと思つてこむ」

「心配しなくても、この世界は壊滅的に滅びに向かって行つてるよ

「そんな抽象的な話は不毛だと思わないか?」

「いや…………やうだな。そうだ。君の言う通り、そろそろ文明が滅んでも良い頃合いだな。一旦リセットして猿からやり直すべきだ」

「同感だ」

ぼくは本気でそう思つてゐる。他の人間にこんなことを言ひと馬鹿にされるか無視されるだけだろう。

その中で彼女は、ぼくと同じように思つてゐると感じた。彼女もまた、本気でそう思つてゐるのだ。

「『氣になる』ことは病氣だ。精神的疾患だ。人間はただ生きてから死ぬまでプログラムされていることだけをこなせばいいだけなのに、誰も氣付かないだけだ」

「難しそうだし、ぼくには分からないな」

「嘘をつけ」彼女は即答した。「君は分かる筈だ。分かる筈の側だ。生きているか生かされているかの違いも分からぬよな愚鈍で蒙昧な輩とは違う。だろう?」

「同意を求められてもな」

「君が同意しようが同意しまいが関係はない。そなれば声を掛けた私が馬鹿みたいじやないか」

「なかなか暴論を正論のよつて吐くな」

だが僕は彼女を馬鹿にする気はなかつた。話を聞くのに退屈しない人間は、もしかすると彼女が初めてかもしれない。

それは旋律だった。ぼくの心に抵抗なく、するりと感じ入る旋律。

「仮に君が馬鹿だったとしたら、今君が言つた事はただの『太者の世迷い事となるわけだ』

「いや、心配しなくて結構さ。」ついして会話が続いている以上、君も同類さ。分かる人にしか分からぬ会話なんて、甘美な響きだるづ?」

「だが少数派はいつも淘汰される」

「難儀な世界だ。私もそろそろ退屈を見つけるとしようが。君の気分を知つてみるのも悪くない」

「退屈なんて知らない方がいいよ。うつかりすると、いつもこの世からどうやつたら完全に消失出来るかなんてばかり考えてる」

「レディオヘッドか。How To Disappear Completely……それも結構。今度一緒に考えようじやないか」

前方から車のクラクションが鳴つた。道のど真ん中にいた僕は、すぐさま道脇に退いた。
女の子の方を見る。
もう彼女の姿はなかつた。

その3 散漫

散漫 11／12 木曜

「おや、君も煙草を吸うのかい？」

大学を出て吸い始めた煙草の長さが半分程になつたところで、女の子が声を掛けってきた。

「ああ、もう二十歳だからね。そりゃ吸う奴は吸うさ」

「しかしこれからどんどん値段が高くなつていくよ。諸外国のように税金を良いように使ってくれればいいのだが、この国にそんなことを求めるのは酷かな」

「確かに……って君、さつき『君“も”煙草を吸うのかい』って言わなかつたか？」

女の子は少し驚き、若干口先を尖らせ、その後僅かに田尻を下げた。

よく分からぬが、感情表現が豊かな娘だと思つた。

「そうや。そもそも煙草を吸うこと自体は犯罪じゃない。それによつて公衆の景観が損なわれることが犯罪なのさ。ところで火を貰えるかな。ちょうど手持ちのジッポーのオイルが切らしていくね」

そう言つて女の子は薄手のコートのポケットから煙草の箱を一つ取り出した。今日の女の子は私服のようで、コートの下には無地のセーター、そしてホットパンツとこう出で立ちだった。どうでもいい

いのだが、季節に関係無く女の子がやたら足を出したがるのはもはや生物としての習性なのだろうか。

その発言は暗に自分が未成年であると暴露していたが、ぼくは特に文句を言つわけでもなく、注意するわけでもなく、ライターを取り出して女の子に近付き、煙草を咥える彼女の口元で火を付けた。

「ふう……やはり煙草はいいものだね。未成年に喫煙の禁止を促すなんて、政府の陰謀かと思えるよ」

「まあ言われてみれば、十代前半の児童がその辺で煙草吸いまくつてたら、公共の景観的には最悪だろうな」

「今や未成年の喫煙は不良の代名詞のようになつていてるからね。煙草が人を不良にするのではなく、不良が単に煙草を吸つてるだけだと言つのに」

「君のへ理屈は聞いていて心地良いな」

「なに、ただの真実だよ」

紫煙を燻らせる女の子は、なんだかそれだけ様になつていた。
近くに立つてみて、改めて女の子が小柄といつことに気付く。ギリギリぼくの肩まで身長があるかどうかといつくらいだ。

なのに、ぼくより大人びた風に見える彼女を間近にして、ぼくは一瞬だけ胸が高鳴った。

特に他意があつたわけではない。

単に、彼女が魅力的な女性であつたことに気付いただけであつた。
小指の半分程の短さになつた煙草を携帯灰皿に入れ、ぼくも一本目の煙草を咥えた。

「そり

「ん?

いつも間にか女の子はぼくの手からライターを引っ手繩つており、それをぼくの口元へと差し出した。

ぼくは少し前屈みになり、火を付けてもらつ。白い煙が棚引き、肌寒い空氣の中に溶けていく。」

「うう一服も、悪くはなかつた。

その4 虚無

虚無 11/13 金曜

「私には我慢できないものが三つある。超音波のよつたな幼児の泣き声と、本を大切にしない奴と、ナスビだ」

「……何故そこでナスビなんだ？」

「あんな見た目も味も食感も本能的に拒否反応が起つる悪夢のような物体を、私は野菜とみなすことが出来ない。あれは食物として致命的な欠陥を負っている」

「じゃあ麻婆茄子食べれないのか。あれ美味しいのに」

「いや、麻婆茄子は食べれる」

「…………」

刻んだピーマンをハンバーグの中に混ぜたら食べました、みたいな感じなのだろうか。……いや、あれはあれで紛れも無くナスビだろう。

ちょっと理解出来なかつた。

だが彼女を理解出来ないのは今に始まつたことではない。恐らくこの先もずっとこうなのだろう。

「嫌悪感と言うのには実に人間的な感情だ。まあ感情 자체が人間独特のものなのだが」

「ぼくは嫌悪感と言つ感情を嫌悪するけどね」

「ふむ……矛盾を孕んでいるが、至極もつともな言い分だ。しかし人間には欠かすことの出来ない感情でもある」

冷たく、強い風が吹き抜けた。

女の子は足が寒くないのだろうか、と思つた。
今日も今日とて女の子は膝上数センチのスカートを穿いている。
ちなみにスカートは捲れなかつた。

「実はさつき挙げた三つ以外にも私は我慢出来ないものがある」

「だらうね」

彼女は好きなものより嫌いなものの方が圧倒的に多そつだ。

「何か分かるかな？」

「……ぼくなら、強いて挙げるとすれば『自分自身』かな」

「素晴らしい」

女の子は感嘆の声を上げた。

「その通り、私も最も嫌悪するものは『自分』だ。なかなか気が合
うね、君」

「じゃあ似た者同士のぼく達は実は互いが嫌いだってことなのかな」

「そんなことはないさ。私が保証する。私は君じゃない。私は君に

似ているが、『私』は『君』ではない

女の子は不敵な笑みを浮かべる。

言いかによつては拒絶されたように聞こえる言葉だが、それは彼女がぼくを受け入れたことに他ならないことに気付くのに時間は全くいらなかつた。

また、『ぼく』も『君』ではないのだ。

「好きと嫌いは紙一重とはよく言つるものだね」

「別にぼくは君のことが好きじゃないけどね」

「おや、フラれてしまつたようだ」

「告白したところOKしないだろ」

「それはどうかな」

「これだから女は狡い。

だが、こういった会話は嫌いではない。
ぼくは意味の無い、当たり障りの無い、他愛ない会話をするのが
大好きなのだ。

その5 転調

転調 11/14 土曜

「意外だね。君がこんな洒落た喫茶店を知っているだなんて」

「大学生たる者、行きつけの喫茶店の一つや二つ持つていななくてどうする」

「そんなものなのか?」

「そんなもんだよ」

今日はすっかり忘れていた明後日提出のレポートを片付けるべく、大学の最寄りにあるとある喫茶店に来ていた。
少女は珍しく今日に限つていつもの場所で出会つてから、ぼくの後についてきた。

道中彼女は言った。

私は締め切りに追われる人間を見るのが大好きなんだ、と。要するに悪趣味だということとは理解出来た。

「ちなみに今私は手ぶらだ」

「見れば分かる」

「財布すら持つてきていないと意味だ」

「……言われなくても会計くらい持つ」

「紳士だね」

「男女差別を肯定するわけじゃないが、『うごうシチューニー・ション』においては男が奢るつて決まってるんだよ。ましてや年上だしね」

「ふうむ……とにかくで差別を否定する人は差別する」とになつて、結局は差別を肯定してしまつことになつてしまつ矛盾について君はどう思う?」

「君、そんなぼくのレポートを完成させたくないのか?」

店のBGMがジムノペティの一一番から一一番へと移る。ちようどぼくの心境も悲しげになり始めた。

「そんなこと言いながら、君、議論したくてずすずして仕草がありありと感じられるよ」

もちろん少女には全てお見通しであったわけだが。もはやぼくに抵抗の余地はなかつた。

「…………否定と差別は厳密には違つ。否定は一方的で、差別は相互的だ」

「つまり?」

少女はコーヒーカップを口に運ぶ。何気にブラックであつた。

「否定は何もかもを打ち消すことだ。後には何も残らない。一方、差別はその後で反対の作用がかかる。結局『どちらか』に帰着する

ことを前提とした上で、差別という表現は成り立つ。君の言う差別は、偏見や先入観から生じる『差別』のことを言つのだろ？」

「成程成程。つまり『差別を差別する』といつ表現 자체がナンセンスだといつことだな」

「ああ。 もうそろレポート再開していいか？」

「それ、提出しなかつたらどうなるんだ？」

「一単位が蒸発する」

「君、大学つて何年まで在学していいか知つていてるかい？」

「学費を君が出してくれるんなら、いへりでも討論しそう」

だが、ぼくは彼女にこの場から去つて欲しいとは思わない。
彼女もまた、ぼくのその気持ちをどこかで汲み取つているのだろう。

ジムノペティが三楽章目に入る。

家に帰るのは、まだまだ先のことになつた。

その6 汚泥

汚泥 11/15 - 16 日曜

今日は少女を見かけることはなかつた。

なんてことはない。今日は日曜日なのだ。

用事が無い日に家を出るほど不毛なことはない。

時刻は午前零時を回つた。

ぼくがシャープペンシルを走らす手を止めると、芯と紙の擦れる心地よい音が止まつた。

外は静かだ。車道は遠いので車のエンジン音はしない。

部屋の中も静かだ。デジタル時計なので、神経に障るあの秒針の音もない。秒針の音は時に雷の音より大きく聞こえる。

音がしない。

世界が止まる。

砂時計が零れきつた後のような、安らかな静寂を感じる。

「.....」

しかし、静かなのはいけない。それが夜になると、尚更いけない。独りの時は、特に。特に。

無音が、うるさくなる。

ちくり、ちくり、と、それはやつてくる。

音は人間が人間たる存在として在るために必要不可欠なファクターの一つだ。

人間は外部の情報を視覚が九十パーセント担つていてと言つが、おそらく目が見えないより耳が聞こえない方が不自由だろう。

ここで言つ『不自由』とは、動物的なものではなく、人間的なものである。

音、と言つたかそれは、声、によつて。

人間を人間たらしめるのは声に依る「ノリコニケーション」に他ならない。

イマヌエル・カントは言つた「目が見えないことは人と物を切り離す。耳が聞こえないことは人と人を切り離す」。

「……彼女なら何て言つかな」

少し想像してみたが、あの風を摑むような飄々とした性格を上手く想像することが出来ず、ぼくは結局黙つた。

背凭れに寄り掛かり、天を仰ぐ。

それはとても物悲しい行為。

「雨でも降ればいいのに」

今日は晴れだつた。

いや、今日も晴れなのだろう。

今日は晴れなのがもしけない。

雨が降つたのは、もう一週間も前だ。

変化が必要だつた。それは掴むものではなく、訪れるものとして。でなければ、

「退屈じゃないか」

退屈。

それは彼女も言つていたような、気がする。

『退』『廃的』『屈』『折』。

事実彼女は退廃的なほどに退廃的であり、屈折を屈折しきつてい
た。

「…………」

田を開じる。

日付が変わった今日は月曜日で、大学があり、講義があり、今日
がある。

つまりは、また、である。

r E P l a Y t h E S t a G e .

そしてぼくは繰り返す。

「兄さん」

今日もまた、平常が訪れる。

それからぼくは妹とセックスして寝た。

その7 疼痛

疼痛 11/16 月曜

昼食はいつだって簡素に済ます。

「だからって育ち盛りの青年が素うどん一杯だけというのはどうなんだい？」

「そんなことより何で君が大学の学食にいるのか訊きたいんだが」

因みに彼女はアランチセットだった。この大学のアランチセットは魚定食と昔から決まっている。

量はそれなりに多い。多分ぼくが頼んだら確実に昼休み中に食べ終わらないだろう。

よくてカツ丼単品が関の山である。

「今日はここで昼食を食べたい気分になつたからだよ」

「なら仕方がない」

“『そつ』『う』いう氣分になる”ことは説明がつかない。それはとても病的なものであり、ナンセンスなものだ。

だから『出来ない』。当然のことだった。

「それにしても友達いないんだね、君。いやいや、友達がいいことは決して悪いことではない。寧ろ他人に微塵も依存しないとするその強靭な精神力は称賛するに足るべきものだし、そもそも人間同士の関係が押し並べて希薄になってきているこの世界において

自分以外の誰かに自分を曝け出すなんて行為はもはや自分を殺していると言つても過言ではない。大体神が死んでいるのに友愛が生き残っているわけがないと思うんだが、そのところ君の意見を聞かせてほしいな」

「……まあうどんを完食させてくれ

「分かった」

正直うどんをえぼくは手こずる。
こここの学食はそもそも元々の量が多いのだ。大盛券はあるのに小盛券はないので、ぼくはいつも苦労している。ぼくの感覚で二人分までとはいかないが、少なくとも一・五人前はあるに違いない。
少女はといふと、もう殆ど食べ終わっていた。

「それにしても、昼食を一人で食べているだけで友達がいないと帰結するのは、何とも短絡的な偏見思考だとは思わないのか？」

「でもいらないんだろ？？」

「いない」

ぼくは水を飲み干した。

遠目でぼくらのことをチラチラ見る集団に気付く。

ぼくが『ここ』にて、少女が『ここ』にいることがそんなに滑稽なのだろうか。

少女はいつもの制服だった。だからなのだろうか？

もちろんぼくは気付かないふりをする。

ぼくは気付いていながら気付かないふりをする行為に長けているのだ。

「一度酷い目に遭つたからね」

ぼくは喉元を過ぎても熱さを決して忘れない。
それは冷たさも同様だ。

「それは良い判断だ。仮の顔も一度まで。この世は取り返しのつかない過ちに満ちていることを知らない人間が多くすぎる」

「だろうね」

傷ついた人間は淘汰される。

「傷ついた人間は淘汰されるからね」

「その通り」

食堂の大きな天窓から柔らかな陽の光が差し込む。
今日は晴れだった。

その8 混濁

混濁 11/17 火曜

好きな色は白だ。

「意外だね」

「どうして」

「男子ってのは無闇矢鱈に黒が好きなものだと思つていたからさ」

「……誰にだつてそういう時期はある」

特に十代中盤の時期に。

それは自然であり、工程であり、密かなものなのだ。もしかしたら赤が好きな人が多いかもしない。だからつてその人が『どうこう』と言う筋合は全くない。それこそぼくの好きな『ナンセンスなもの』だ。例えるなら、血液型占いと同程度には物事の裏を見れば、途端に視界は開ける。

因みにぼくは本当に白が好きだ。

単純に『無』が好きだと言つてもいいかもしない。『無』が『白』だと誰が断言したわけでも証明したわけでもないけれど。だからぼくはよくここに来て思案に耽る。白に彩られたこの空間に。外界とは隔てられたこの空間に。ベンチは一つ。ぼくと少女は並んで座る。

「煙草あるかい？」

「メンソールでなければ」

「何でもこよ。銘柄なんて副次的なものに過ぎない。私にとって
はね」

「ぼくはマルボロのアイスプラスしか吸えないけどね」

「決まってる、ここはまたそれで幸せなことなのさ」

やう思つよつて言つて、少女は器用に、コーヒーカップを傾ける
のと同時に手つあで（指つあで）煙草を燃らせる。

「やう言えば私も好きな色は白だ。『色』と申つか、白とこつ『存
在感』が気に入っているのだけれど」

「ぼくは君にそが黒が好きだと思つていたよ」

「黒も好きだよ。正確には白黒が好きだ。私は対になるのも自然
と好きになつてしまつた」

「……君じりしね」

「そういう愛し方もあるんだよ」

……ぼくは考へる。

今まで考へたことのなかつたことを考へる。
ぼくは枠に囚われている。

それは無自覚であり、ぼくはそれに気づいていない。
その思考も全て想像上の産物だ。

そして少女は

「君は運が良いね」

「知ってる」

「だと思つたよ」

知つてゐる。だからぼくはこいつして少女と話してゐる。
昔の哲学者は言つた。「無知の知」と。知らぬことを知らぬのは
罪だ。知らぬことを知つてゐるのはそれだけで価値がある。
しかし、知らぬことは知らぬのだ。
過程ほど無意味なものはない。
無意味ほど無意味なものはない。

そうやつてぼくは無理矢理生きてきた。少女に出会い今まで。

「実は私も運が良かつた」

「それも知つてゐる」

「だと思つたよ」

だからぼくは少女と一緒にいたいと思つた。

その9 雑多

雑多 11/18 水曜

「本屋はいいね。知識に囲まれている実感はいかなる欲求にも替え難い快樂だよ」

「確かに君は三大欲求より知識欲の方が強そうな顔をしているね」

駅前の本屋はそれなりに大きい。ぼくは常連だが、少女も常連なのだろう。なんとなくそんな感じがした。

「それは言い過ぎだわ！」

「そうかな」

「大体どんな顔だ、それは」

「そんな顔だよ」

だがそんな人は往々にしているものだ。少なくとも、ぼくが思っている以上に。それが例えぼくの隣にいたって、何も不思議に思うところはない。居るところに居ることに対し、説明を求めるべきではない。ぼくはぼくの隣のことだって分かりはしないのだ。ぼくの隣も日本の裏側も、特筆すべき差異はない。

「それで？ 何の本を買いに来たんだ？」

「ケツチャムの『隣の家の少女』」

「…………一緒に来たのがぼく以外だったらドン引きだね」

「それにしても共通の趣味をやつと見つけた、みたいな顔をしているよ」

「……お互いに顔によく出るみたいだね」

「全く、難儀なものだ」

溜息を吐きつつも、そう言って少女は目を細め、くつくつと笑った。

あくまで静かに、見つけた何かを大切に包み込むような優しさで。

「そんな本ばかり読むのかい？」

「私がグロテスクで反社会的なテーマに惹かれるような人間だとも？」

少女は少し心外そうな口調でありながら、やはりどこか嬉しそうな笑みを湛えている。

ぼくの次の言葉に期待している。

それはぼくも同様だった。

「人はそういうのに惹かれる。この前拷問の歴史をコミカライズした本がとても売れてた。皆想像力を働かせるのが好きなんだよ、多

分」

「確かに。殺人という事象を一つ取り上げても、それがただの通り魔であるケースと、スプリ キラーであるケースと、劇場型殺人で

あるケース。人が殺され、それに付隨する事象に人々は興味を示す。所詮他人が一人死んだところで心動かされる人はいないしね。皆やはり『刺激』が欲しいんだろう

「『刺激』が欲しいんだろ？」

「『刺激』と言つか、『異常』だな」

「ふむ。言い得て妙だね。これだから人間の中で生きるのは止められない。もし鳥に生まれ変わったら一体何を期待して毎日を生きればいいのか分からぬよ。鳥の世界では獵奇殺人なんて起きそうにならぬしね」

どうだろうか。案外鳥は彼らの世界で、僕らの知らないところで獵奇殺人を起こしているかも知れない。
ぼくはやはり、まだ何も知らないことだらけだ。

「えっと、この辺だな…………あつた」

少女は文庫の棚から田代ての本を取り出す。

「君は何も買わないのかい？」

「ちょっとこの前来た時在庫が無くてね。取り寄せてもらつてある。昨日入荷の電話が来たから一緒にレジに行こうか」

「因みに何の本だい？」

「ジョン・ソールの『暗い森の少女』」

「悪くない」

そう言って少女はまた嗤つた。
だけど、ぼくにはその嗤いが心地よかつた。

そのXX - ?

【独りガタリ、或いは虚空す個喰う】によつて】 XX / XX

偏見、つまりは偏った見方とはよく言ったものだね。

その通り人間は偏見でしか物事を見れない。測れない。だがそれはマイナスイメージではない。人間特有の、ユニークな一面だ。人間である以上、偏見を持たずに日々を生きることは出来ない。だからこそ平等なんて嘘つぱちなわけだよ。

人間が我々の知る人間である限り、偏見はエントロピー的に増大する。偏見……言い方が悪ければ、推測、とでも言おうか。多面から観測したことで人間は新たに未知なる道を見出すことが可能だ。この未知と道が同音であることは決して偶然ではない。

道はいつでも知られざる事象として我々の前、或いは横、若しくは下に構えている。果たして、今まで歩いてきたそれはどうだったのかな。

話を戻すと、人間を人間たらしめるものは何か、とここで問おう。

一つに知能、と誰かが言う。だがそれは大きな勘違いであり、一番陥り易い人間ならではの欠点だ。そもそも人間が一番知能を持っているとは、彼らが観測したデータの中の結果でしかない。つまりは限界を勝手に決めた人間の驕りということだ。

一つに感情、と誰かが言う。確かに人間は感情豊かで、それ故理性を自覚している。成程工スに踊らされているようでは人間ではない。しかし究極的には、感情は後天的なものだ。それは知能とよく似ている。それらに先立つものの存在はあり得ない。喜怒哀楽、その対象をよく考えるんだ。

答えを言おう。それは単純明快であり、人間を人間たらしめるものは、ご存知人間 자체でしかあり得ない。

これは種の問題だ。ある有名な言葉を借りるならば、『人間は人間として生まれるのではなく、人間になるのである』とでも言えようか。人間に『成る』のだ。人間は認識するよりも早く、認識されることによつてこの世に現れることが出来る。そしてそれは徹底的に不可逆的なものだ。

全ては超自然、つまり世界によつて生かされている。自分達を主体的と思うのは間違いではないが、ある意味ではそれは本質からズレた思考経路だ。自分がどう思われているか、自覚しなかつたことはないかね？

愚かなり人間。アダム・カドモンあらゆる知能、感情、自己を持つてしまふ、人間は『完成』になることは永劫無い。

緩慢な繰り返しに飼い殺され、それで善しとする救い様のない生き物。

ならばそんなことを考える頭がどうしてあるのか。それを考えよ。

人間は一茎の葦でありながら宇宙である。
それに気付け。気付くことから、意味は始まる。
意味を見つけたならば、『それ』に至れ。

その10 振動

振動 11/19 木曜

「忘れっぽいとは美点だと思わないか？」

「何故だい？」

「おいおい疑問を疑問で返すなよ。君ともあらう者が」

「ぼくに期待するといつか酷いしつべ返しを食らひつ時が来ると思つ
た」

「君がそれを言つかい？」

「それもそうだ」

忘れる、といつ行為は主にマイナスイメージとして漫透している。それは日常生活において健忘とよく関連付けられるからだろう。健忘は疾患であり、大事なことを忘れる大変なことになるのは周知の事実である。実のところ、それは相対的な論に過ぎないのだが。絶対的なことなど起ころはずがないのだ。

絶対的なことなど起こりようがないのだ。
人間が人間であり続ける限り。

電車がトンネルに入れる。
耳の奥から綿棒がゆっくりと這い出てきそうな感覚が、一三秒してから訪れる。

当たり前だが、それもまた相対的なそれに過ぎない。

「まあ話を元に戻すけど、これでも記憶力は良い方でね。忘れっぽいことがどうこいつことなのか分からないな」

「眼鏡を上にずり上げて顔を洗つて顔を拭いた後に『眼鏡眼鏡』って言ひたの」

「ルーティンフレーム的行為は説話か寓話であると思つんだが」

「世界は広いよ。」

「やつこつせのかな」

「昨日ウチの兄がやつてた」

「.....」

不幸にも、ぼくは今朝妹起こしに行つたら彼女が「もう食べれないむにゅむにゅ」とか寝言でぼざいていたのを発見したのを思い出した。

ぼくは狼狽した。

ぼくはやり込められるのが苦手であり、論破されるのが苦手であり、後手に回るのがどうしたって苦手なのだ。

て言つたお兄さんがあったのか。……あまり想像したくない絵面ではある。そういうのは適役があるのだ。少女と少女のお兄さんには失礼だが、見た目十代中盤の彼女より年上の野郎が行つていいでジ行為では断じてない。

そんな風に思案するぼくを見て、少女は黙した嗤いを向ける。車両が揺れる音に重なつて、アナウンスが聞こえる。
田舎での駅は次に迫つていた。

「実は私は忘れっぽい」

「意味記憶の方が正常だつたらどうにかなるが。Hペソード記憶なんて実務的なことくらいとか使わないんだから」

「結構ドライだね」

「クールと言つてほしー」

嘘だ。

いつか「五樹君は残酷だね」と言われたことがある。
ぼくは納得はしなかつたが否定もしなかつた。

常にプラスマイナスゼロでありたいぼくにとって、冷たさも温か
みも必要ではないしそもそも持つべきものではないのだ。

電車が徐行する。
電車が止まる。
ドアが開く。

「君が『そつ』ありたいなら私は『こじる』こじるよ。尤も、どちら
にせよ君次第だけれどね」

ぼくは少女に背を向け、振り返ることなく電車を後にした。

その11 順序

順序 11/20 金曜

テレビがある。

映し出されているのは殺人事件のニュースだ。

なんでも白昼堂々単独犯で無差別に四十二人殺したらしい。確かにスプリ キラー のギネス保持者はこの前八十人近く殺したテロ犯だつたことを思い出し、これだけ殺してもまだ半分くらいなのか、と可笑しな感想を抱いた。

しかし戦時中にはその倍を一人で殺した人もいただろう。人間は観測と認識によつてしか成り立たない。

「思うんだけどね、私には『物事』の順序の基準が分からぬ」

「ぼくはいきなり君が何を言い出したのかちょっと分からぬ」

気にせず少女は続ける。

全くもつて、変わり映えしないいつもの流れだった。

「人間の三大欲求の中に『生存欲』が入っていないのは何故だと思う?」

「感情論みたいな形而上の事象は決定付けが難しいんだよ、多分。哲学者は口うるさい変人ばかりなのと同じやないか?」

「性欲だって一種の感情論じゃないのかな?」

「男だつたら去勢すれば事足りそうな気がするけどね」

「……なかなか斬新だね」

「それでいて的確明瞭じゃないか?」

テレビのニュースは続く。

大学生が小学生に性的悪戯を働いて逮捕されたみたいだ。

「もし君に子供がいたら、性的悪戯についてどう説明しようつか」

「……『物事には順序がある』ね……」

「おそらく頭を切り落とし、その上顎をめつた刺しにして路上に放置したケースでも、世間は『その通り』に報道するだろう。だが、小学生が体の至る所を弄られた挙句レイプされたとしたら? 殺人と性行為。子供に悪影響を与えるのは一体どちらなんだろうね」

「どっちもいづれ知ることだよ。人間はしばしば自分が理性的な生き物だと勘違いしている。それに」

「それ?」

「被害者は男の子だ。それだけでまた違つてくれる」

「確かに」

だから人の命は地球より重いだなんてとんでもない暴論であり、せいぜい21グラムが関の山だろう。尊厳などというものは自己を防衛するベールに過ぎず、暴力は自己を肯定する最も手っ取り早い方法だ。

世界はそう決定付けられている。

意味がないことも、ちゃんと『意味がない』意味があるのだ。

「結局のところ、人間は感情的な生き物だよ。何もかも『そいつせざるを得ない』時に重い腰を上げる」

「でも今は情報化社会だからね。頭でっかちが多いつたらなんの」

「耳年増つてヤツか」

「そうだね。知識だけあっても仕方がない」

「知識ねえ」

「君に朗報だが、これでも私は処女だ」

「嘘吐け」

「嘘だ」

「それも嘘だろ?」

「私は嘘は吐かないよ」

つまり少女は嘘しか吐かない。

嘘の嘘はやはり嘘になる。嘘の次に真実を言つても結局嘘でしかなく真実の真実も嘘である可能性は決して捨てきれない。

+ × + = - ?

ノイズが、酷い。

「試してみるかい？」

ぼくはテレビを消した。

その12 雲散

雲散 11/21 土曜

土曜日。しかし大学はある。午前中までだが。

朝に少女に出会うのは初めてだつた。少女が通う学校は私立なかもしれない。

少女は紺色のブレザーの上に学校指定であると思われるコートを羽織り、更に白色のマフラーまで装備しているが、相変わらずスカートの丈は膝上だった。因みにハイソックスなので、瑞々しい肌色が見ているだけで寒々しい。

全国の女子高生は（別に高校生に限らないが）冬季限定で男子に秘密裏に我慢大会でも開催しているのだろうか。

「今わけの分からない」とを考えていたら、「

「わけの分かる」とを考えている時なんてないよ」

「哲学者って発狂死するイメージがあるんだが

「単にぼくは思つたことを思つてるだけだ。哲学者なんかとは全然違つ

確かにニーチェは頭がおかしくなつて死んだが、彼の思想からして自分がその中心に坐していたとすると、その狂気も頷ける気がする。

影響する側にとって、その精神状況は想像に易くない。常に耳元で世界を滅びに向かわせる呪詛を唱えられ続けたら、誰だって発狂して戻つてこれなくなるだろ？

人は内的要因だけで十分死に至ることが出来るのだ。

「寒いね」

「ならスカートをもつと長くすればいい」

「それは愚問と言つものだよ。世の中には無数の秩序があるのぞ」

「今日が寒いのも？」

「勿論」

そう言つて少女が吐いた息は白かった。

世界は年々寒くなつていつている。地球温暖化なんて誰が言い出したことかは知らないが、寒くなつていつていることには変わりなかつた。

それもまた言い訳かもしれないのだけれど。

「今日も学校か」

「私立は大変なんだよ」

「でもどうせ半ドンなんだろ？？」

「半ドン？」

「…………」

ぼくはカルチャーショックを感じた。

「天井の仲間じゃないからな」

「先手を打たなくとも、そこまでお花畠な思考回路は持ち合わせていないよ。で？　どういう意味なんだい？」

「午前中で授業が終わることだよ。土曜日の意味と言つか、半分休日の意味ってところかな」

「…………なんかい？」

「…………」

ぼくは勉強不足を痛感した。

人はいつだつてそうだ。情報を共有し合い、取捨選択し、それゆえ必要以上の知識を持ち合わせようとしてない。『それ』こそが本質だというのに。

本質はいつだつて、道から逸れた所にある。

「直感なんだけど、君つてよく死語を用いたりしないかい？」

「死語つて言葉自体が死語だろう。皆自分が先端であることを他共に示したいだけだと思つけどね」

ぼくらは歩く。

少女と同じ制服を着た人がちらほら出てきた。生徒が女子しか見受けられないところから見ると、女子高なのだろうか。
ぼくはこの辺りの地形には疎い。

「じゃあぼくはこっちだ」

「私は」ひびだ

ぼくは少女に背を向ける。
数歩歩いて振り返る。

「…………

空は曇天の様相を呈していく。

その13 幻想

幻想 11/22 日曜

朝から降り続いた雨は過ぎには止み、ぼくは四時過ぎに本屋に出向いた。

いつもの駅前の本屋ではなく、電車で二十分ほど揺られた先にある、都心部の巨大チーン店の本屋だ。ぼくは基本的に本の発売日を事前に確認しない。『先に知る』ことは、生きていく上で最も愚かな行為の一つだ。ならばこうして生きることは、一種の処世術であるのだ。

果たして今日は愛読している作者の新刊が出ていたので、それを買つ。帰りの電車の中でそれを読む。電車の中は非常に良く出来た読書空間だ。ぼくは電車を用いた長旅に際して必ず文庫本を数冊携帯する。どちらかというとぼくは本を早く読む方だ。そしてぼくはそれ以外の暇潰しの方法を知らない。

帰ると妹が居た。

少し釣り目でありながら、人懐っこいそんな笑みを絶やさない。外では知らないが、家の中ではだらしなく今日も明らかに身に余るセータ一枚だけ着ている。そして、肩にかかる程度の白髪。

ぼくの妹。

霧江常夜。五つ離れた妹だ。

「（）飯にする？」

「ああ」

「お風呂にする？」

「だから」飯

「そ・れ・と・も」

「飯」

「はーー」

コビングに行くと、既に夕飯の準備が整っていた。
ぼくと常夜は席につき、ビシビシともなく食べ始める。

「お風呂ついでにさうすがつもりだったんだ」

「晩」飯の前にお風呂入ったことなんてないくせ

「そうだったか？」

「自分に限って自分自身のことはなんにも知らないもんだよ」

常夜は皿を細める。まるで蠅燭の炎が不意に揺らめくよう。一瞬から猫のような顔をしているが、更にその双眸は鋭くなる。たまに猫そのものに見られていると勘違いする。視線を感じると、そこには猫がいるのだ。

常夜は囚われている。それは百も承知であり、その根源は誰でもないぼくなのだ。
だけばくは焦らない。

『何事にも定まった時期があり、全ての嘗みには時がある』のだ。

「兄さん」

「何」

「好き」

「やうひか」

空氣であり、記憶であり、旋律　　そう、忘れがちであつながら『そば』にいるのが旋律。ぼく達は「」の流れの中で生きている。やはり、人は音の中で生きている。

「そう言えば兄さん、この頃一緒にいる女の子って誰？」

「……知ってるだろ」

常夜が訊くことはいつも自分の知っていることだ。
そしてつい先日気付いたことだが、あの少女と常夜の学校の制服は同じだった。

「クラスメイトなのか？」

「ううん。学年は同じだけね。不思議な子だから、私だけじゃなくて他の子もあんまり近寄らないんだけど。でもこの頃男の人と一緒にいる田撃情報がいっぱい出てきて……ンククッ、兄さん有名人だよ？」

「マジか」

変装道具は眼鏡と帽子で十分だろうか。

「でも

常夜は続ける。

「気をつけること元越したことはないんだよ？」

常夜は食器を持って、キッチンへと移動した。
ぼくは

その14 耽溺

耽溺 11 / 23 月曜

「止まない……」

朝の天気予報では午前も午後も降水確率はゼロパーセントだった。ならば、これは夕立というものなのだろう。家を出る時雲一つないのにわざわざ折り畳み傘を持つて出る杞憂な性格はしていないので、ぼくは駅まで歩いてあと十分程度のところで、あまりの雨脚に負けて戦略的逗留を計ることにした。

最悪雨を被りながら駅へ向かうことは出来るが、そうなると全身ずぶ濡れのまま電車に乗ることになる。そして今は帰宅ラッシュの時間だ。ぼくは極力人に迷惑をかけない生き方を心がけている。

「奇遇だね」

「うん?」

「何してるんだい?」

そこには傘を差した少女が立っていた。

「雨宿りだよ。やつれいや、こんな時間まで授業があるのか?」

時刻は午後七時。ぼくはすっかり忘れていた中間レポートを図書館で仕上げていたので、こんな時間になってしまったのだが。

『忘れっぽい』性格と『つい忘れてしまつ』性格は全然違う。

「…」 も色々あるんだよ

「成程」

「私も雨が好きだが、限度とこつものがあるね」

「全くだ」

空は未だに頭が痛くなるような灰色が散りばめられており、それでいてそれらは決して拡散することはない。

雨雲もそういうことを思つていてるのだ。

「行かないのか？」

「たまには雨宿りも悪くないと思つてね」

「確かに」

雨宿りは神秘的だ。そこに意図せず介入する『偶然』 じまくはど
うしようもなく惹かれる。或いは実のところ運が良いのだ。少なくとも僕にとっては。そして恐らく、彼女にとっても。
まるで夏の日に降る雪。冬の日に差し込む暑い西日。

春の日に眺める紅葉。秋の日に散りゆく桜。

「止まない雨はないし、覚めない夢もなく、明けない夜はないと言
うけれど、止まない雨も覚めない夢も明けない夜もあると思わない
か？」

「可能性はね」

人間は知りぬへしていない。

『 そうでないこと』なんて誰も断言できない。
だからぼくは『旋律』に身を委ねる。

「まあ止まない雨は流石に二田あたりで辟易しそうだぞ」

「でも二田も晴れっぱなしだと、ぼくは退屈だけだね」

「その程度でかい?」

「その程度だから」そだよ

「変わつてゐるね」

「…………」

君がそれを言つた、と反論しそうになつたが何だか言つたら負け
な気がしたので踏み止まった。

「止まないなあ

「…………」

「入れてあげてもいいんだよ?」

「頼む」

「君結構口下手だね

「放つておいてくれ

「いたな面白ことをかい？」

ぼくは黙つた。

からかわれることには慣れていない。

兩脚が一層強まってきた。

その15 流水

流水 11/24 火曜

『全てがおかしくなつていいくのに、彼女にはなにもできることがなくて、自分の無力さを感じざるを得なかつたからだ』

『ベロニカは死ぬことにした』パウロ・コエーリョ

「何の本だい？」

「愛読書といつやつや。人間、最低でも一冊はそういう本を持つべきだと思つんだけど」

「同意だね」

本には一種類ある。一度しか読まない本と、何度も何度も読む本だ。それは音楽にも寸分違わず同じことが言える。何事にも物事には一種類しかない。

それはとても大切なことだ。ながら呼吸すると同程度には生きることとはそういうことなのだから。

「それで？ 何を読んでるんだい？」

「『私』さ」

少女が顔を上げ、漆黒の硝子を思わせる瞳をぼくに向かた。

それは今までぼくに向けられた視線のどれとも違つていて、旧知に向けられた視線で初見に向けられた視線でもあつた。

「何だつて？」

「これは『私』なんだ」

ぼくは発言の続きを待つたが、少女は再び書籍に目を落とし、そのまま彫像のように動かなくなつた。そう、確かにその様子は彫像であり、意味深であり、静謐だった。

少女がそう思うのなら仕方がなく、ぼくは煙草を取り出して一本吸つた。白に白が重なり、より濃い白になる。時間は確かに流れているのだろう。しかし空間は静止しており、前にも後ろには行かず、ただただ留まつていた。白も黒も『止』を連想するが、そのイメージは寧ろ逆だ。前者が『静止』で後者が『停止』である。

「……人が自殺する理由って何だらうね」

唐突に、少女が口を開いた。この場にはぼくと少女しかいない。その問いはぼくに向けられたものなのだろうか。

その声もまた、ぼくが初めて聞く種類のものだった。

「自殺、か」

「そう。自殺、だ」

「そのテーマだけで一晩語り明かせるな

「だけど明けない夜もある

「その通り」

だからぼくは答える。

「人は無力を感じた時死にたくなる。そうプログラムされてると思つていい。自分はどうしようもなくなくなつた時、人は最終的に何もかもかなぐり捨てて何かに縋りたくなる。それが『死』だ」

「無力。何だか綺麗な言葉だね。透明感もある。とても、美しい」

薄く笑みのようなものを湛えながら、少女は灰皿にあつたぼくの吸い掛けの煙草を手に取り、躊躇いもなく吸い始めた。

「それにしても自殺だなんて、いきなり穏やかなじやない話題だね」

「何言つてるんだ」

そう言つ少女は、本当に腑に落ちない表情を浮かべた。まるで、何故生は死ではないのか質問されたかのようだ。

「自殺ほど穏やかなものはないじゃないか」

ぼくは一度瞬きをし、一度息を吐き、頷いた。
そして今日もまた、穏やかだった。

その16 前々

《前々》 11／25 水曜

突如として訪れるものは、突如として訪れるものでしかない。偶然とは必然の範疇にある事象であり、物事は起るべくして起るしかないのだ。

だからぼくは驚かないし慌てもしない。考えるだけなら誰でも出来る。

ハプニングは降つて湧いてくるものではなく、蜃氣楼のような不透明さですぐ傍に佇んでいるものだ。

当人の望む望まずに関わらず。

「…………」

「どうしたんだい？」

「いや、別に……」

視線は本当に『突き刺さる』ものであるとぼくは知っている。あながち視線で人が殺せるという比喩は物理的に見ても間違つていないのだろう。

振り返ると、そこには誰もいない。隣には少女がいる。その隣にはぼくがいる。当たり前だ。いつして並んで歩いているのだから。おかしいことなど何もない。

「よく皆『別に』と言つけれど、アレは何なのかな。日本人は語尾を省略するからいがあるから日本語が難しい言葉だと勘違いされる」

「実際難しいだろ？。主語を省略するのが当たり前の時点で

「多分日本人は推測するのが好きなんだろ？ね。いや、そういうべくよつにされてきた、とでも言おうか。とにかく昔から回りくどいことが美点とされてきたから、俳句や短歌みたいな文化が出来上がったんだろ？」

「寧ろ逆じやないか？」

「だから全てを面白解釈に委ねてきたのさ。結果、個人の数だけ世界が出来上がってしまった。世界世界世界世界。耽美でありながら諸刃の剣だ。限界も近いんだと思つよ、私は」

少女がそう言うのならそつなのだろう。

……ぼくは想像する。ベニヤ板の皮が剥がれ落ちていくよつて、元風化された石壙が零れ落ちていくよつて、耐え切れなくなつて崩れ落ちていく様を。

それは日曜日の朝であり、午前二時の信号機であり、木漏れ日とそよ風が差し込むカーテンだ。

または止まつた扇風機であり、雨上がりの雲の隙間であり、靄の中で見る夕焼けだ。

静かでありきつたものは、どんな轟音よりも勝る。
一番大きな音は、無音だ。

「気付くと一日は無いものだね」

「寝てたら一瞬だけビ」

「君は大学に行つているだろ？。」

「『講義を受ける』こと』は必ずしも『講義を聴く』こと』とホール
じゃない。むしろ『聴くこと』『講義に出席する』こと』は『講義を受け
る』こと』トイコールでない場合も存在する」

「日本語は難しい」

「同意だね」

因みに『はなやんと『出席』してくる。この世界に『無意味』
なことはあっても、『無黙』なことは何一つとしてない。
世界とはいつもあるべくしてある。
そしてまた少女も。

その17 遠雷

遠雷 11/26 木曜

ぼくは人を見つけるのが得意だ。人の視線に敏感なのだから当然だ。人の視線に気付きやすい人間は人探しが得意だと相場が決まっている。

「あれ、今日は体操着なんだね」

服装が変わつていようが、少女を視界に捉えるのは容易い。あんなに伸ばした黒髪を持つ人間をぼくは他に知らない。

少女は自販機の前でポカリスエットを飲んでいた。因みにぼくはアクエリアス派だ。

「…………」

「…………？」

返事がない。

視線は髪に隠れて見えない。

人違い……なわけがない。『これ』は間違いなく『少女』だ。視覚的要因など関係なく、ぼくにはそれが理解出来る。人を同一視するには、第六感は必要不可欠なのだ。

しかし返事がないのも事実であり、ぼくがもう一度声をかけようとしたら、少女は振り向いた。

「…………君か」

「…………体調悪そうだね」

「…………第一声がそれとは、そこまで酷い顔をしているらしいな、私は」

ワンテンポ遅れた応酬が少し心地好い。

本当の第一声は体操着云々なのだが、それは置いておく。取り留めのない会話は大好きだが、やはり少女の言つた通り何事にも順序がある。整列できないものはないし、全てのものは整列されていなければならない。

『綺麗に』整列されていれば尚良い。そんな口が一度はあつてもいいのかかもしれない。

少女は有体に言えば熱っぽかった。瞳は力無く垂れ、頬は上氣し、少し呼吸が荒そ�ではあった。

そしてどうでもいいが少女は胸が大きかつた。着痩せというヤツなのだろうか。ジャージ着用とは言え、体のラインがいつもより明らかなので、見えてしまったものは仕方がない。

……なんだか調子が狂う。

「ここのでならばぼくの視線を捉えた少女からのからかいがあつてもいいのだが、それがない。

異常は嫌いだ。

ぼくはチーズを探さないのだから。

「もう理解出来たと思つけれど早退だよ。君は今日は早く授業が終わる日なのかい？」

「そんなどころだ」

大学生には任意に自主休講の権限が与えられている。尤も自己責任だが。

「……なんだか口を開くのも億劫だね」

「『雄弁は銀、沈黙は金』と言つじやないか」

「単に『口は災いの門』に対する戒めだろう。大体黙つていて得をすることなんて一つもない」

「君を見るとやう思つよ」

いつしかぼくらは歩いていた。

そしていつしかぼくは少女の荷物を持たされていた。

「眠たくなつてきた」

「学校で寝てればよかつたんじやないか？ 保健室くらいあるだろう」

「あんな固いベッドじや寝れたもんじやないよ

「でも君の形は明らかに病人だ」

「救急車でも呼ぶかい？」

「騒がしいのは苦手だ」

「私もだ」

そして少女は眠つた。
ぼくは途方に暮れた。

その18 発展

発展 11/27 金曜

「人間は全知全能にはなれない。何故なら知らずにいた方が幸せな知識が世界の殆どを占めるからだ。何を以て『幸せ』なのはこの際置いておくが。人間は幸せなくしては生きてはいけないのは摂理だ。もしそうなれるのだとしたら、それはもう人間じゃない。それが禁忌だとは言つていないのでね」

その言葉を最後にぼくは彼と別れた。

彼は何でも知つていそうな顔をしながら、何でも知つていそうな口ぶりで、事実何でも知つていた。

「心配しなくてもらにかは目覚める。いつかね。決められてることは変更することは出来ない。分かるだろう?」

分かつてゐる。だからぼくは何も言わなかつた。

何も言うべきではなかつたし、何も言う必要性すらなかつた。

ただ一つ解つたのは、何が終わつたことくらいだつた。ぼくの中での『程度』まで測ることは出来なかつたが、それはとても重要なことであり、無限の中の一のように瑣末事でもあつた。

やはり『起こつた』という事実が大切なのだろう。まだ何も分からぬぼくにはそれだけで十分だつた。

「幸いにも君は何も知らない。何を以て『幸い』なのかはこの際置いておくが」

何も知らないことが? そんなバカなことがあるのだろうか。

「人間は急に視界が広がると逆に何も見えなくなる。暗闇から急に明るい所に出た時のようにね。情報の処理が追いつかないのさ。それは仕方のないことだし、少なくとも不幸なことではない。何故ならそれが普通なのだから」

微笑してから、「だけど」と彼は続けた。

「ろにかは違う。そして当の本人は倒れた。一時的なものだけどね」

……ぼくは今まで、何を知っていたんだろう。

知らないことは不安だ。だけど変化は望まない。ぼくはただ沈黙する辞書でありたいだけなのだ。退屈かどうかは、それから考える。

「君はまさに『つづてつけ』だ。ろにかが目をつけたのも頷ける。ただ」

ぼくは目覚めた。

「…………」

全てが緩慢に動いている。身動きすら制限されそうな重たい空氣に囚われた部屋は、昼と夜の境目の陽光を溜めこんで息苦しい。起きぬけのノイズを耳に残しながら、ぼくは考える。

思考は正常だ。正常。『正常』。

ぼくはベッドから起き上がり、一階に下りた。

「あ、『』飯食べる?」

「いや…………」

何か言おうとした気がしたのだが、途中で忘れてしまった。

「変な兄さん」

そう言って常夜は笑つた。それを見て、ぼくはよひやく夢から醒めたのだと実感した。

ぼくは少しだけ考えて、常夜に訊いた。

「餘邊ろにかの住所を教えてほしい」

「…………身内がストーカーだった場合ビリすればいいんだが」

「どうもしなくていい」

ぼくはることを選んだ。

変わることは望まないが、ぼくは変えたいことを望んだ。

そのXX - ?

XX - ?

『三界の狂人は狂を知らず。

四生の盲者は盲を識らず。

生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、
死に死に死に死んで死の終わりに冥し。』

『秘藏宝鑑』弘法大師

それは既にそこにあった。
そして、そこにある。

……いや、『既に』という表現は正しくない。そうなると無かつた時間が、空間が現れる。『そうでなかつた』場合が計らずしも出現してしまつ。

そんなものはないのだ。あるものはある。あるということは、それだけで完結してしまうものなのである。それは普遍的であり、絶対的であり、両端に無限の如く延びる永遠であるのだから。

恐らく、『そこ』という指示語もおかしい。それはどこにでもいるものである。『そこ』にいれば『ここ』にもおり、『あそこ』にいれば『そこ』にもいる。

だがそれは坐しているものであり、究極的に動きはしない。動いているのは、いつだって観測する側の方だ。それもまた氷山の一角であり、釈迦の掌でしかないのだが。更に言えば、その無数にある意思の一つに過ぎない。

しかし、それも　彼女もまた、退屈していたのだ。
退屈……そういう感情……感情ですらない、それは一時の『搖
らぎ』。

「嗚呼、そんなものもありましたね」

無数の風景が、高速で走る車から窓の外を眺めるように、一瞬で過ぎ去っていく。それは一度と戻らない。似たようなものもあるかもしれないが、戻らないのだ。

彼女はかつてそれを止めたいと願つた。
当然だが、それは叶わないことだった。
そして時は満ちようとしている。

「あの子は果たして、どうするのでしょうか？」

滅びるか。それもまた一興。今では対になるものが圧倒するだろう。そうなつてしまえばこの身が果てるのも必定。まだ認識どころか観測すらされていないが、こつなつたが最後時間の問題である。
…………しかし。

「

再び、『搖りざわ』が訪れる。

ここにとこり頻度が高い。アレが近付いて来ているのか。
死が。もう一つの天が。
それは音も無く、死神の鎌のような不吉な冷たさと鋭さを携えて。
あまり、良い気分ではない。…………気分？
彼女は思つ。やはり、いけない。

「ここまで侵攻されていましたか

若干ではあるが、微々たるものではあるが、至んできていふ」と
には変わりはない。

だが、それによつて彼女にも変化が現れた。平坦であり、清潔であり、無である彼女にも。果たしてそれは感謝すべきことなのか。自分が自分に気付くことは簡単なことではない。

改めて思う。

彼女は世界を愛しているのだ。

この薄汚く薄寒く薄暗い世界でさえも。

Amor , ut lacrima , ab oculo oritur , in pectus cadit .

「キリエ、イツキ」

あの子が認めたとされる人間。

そして彼女は『訪れるまで』静かに観察する。

登場人物その1

畠辺ろにか（あらたべ ろにか）：少女。世界を統べ、世界に殺される。全にして無。天なる器を持つ者。

霧江五樹（きりえいつき）：青年。万能。友達皆無。K Y U E I O S .

霧江常夜（きりえとこよ）：五樹の妹。五樹こそが世界。五樹の連絡先を知る人物その1。

畠辺幻〇一（幻想天）：ろにかの兄。旧支配者。第一の天。

価々無杏梨（かかなしあんり）：常夜の手足。常夜の愛人。

氏咲松久（じじさきまつひさ）：最後だった人間。幻、彪の旧友。

椿彪（つばきあや）：幻、松久の旧友。世界に捨てられた女。

零式ぐるる（ぜろしき ぐるる）：白紙の終焉者。

皇周（すめらぎ）：愛の左腕。魔女。

円上神威・愛の右腕。人間でもなく神でもない異物。

月見坂愛・ろにかと対になる少女。世界を呪う。現『世界』支配者。

その19 駆雨

驟雨 11/28 土曜

最寄駅から大学方面とは反対方向に八駅、即ち終点に着くと、そこはいわゆる高級住宅街として名高い地区だった。

駅前はそれなりに賑わいを見せているが、五分も歩けばぼくの基準で豪邸と言つても差し支えない一軒家やマンションが立ち並ぶ閑散とした路地へと身を投じることになる。

駄辺ろにかの家は駅から十一三分歩いた所に現れた。

「…………」

ぼくは常夜から訊き出した住所のメモに田を落として、もう一度顔を上げた。

少なくとも、それとそこに相違はなかつた。
そこには一目ただけで三十階はあるだらう真っ白のビルが聳え立つていた。そう、それは少なくともビルだった。マンションではないことはすぐに分かつた。

ここには、人の生活臭が微塵も感じられない。

単なる『建物』が在るだけであり、その静謐さは人間の進入を拒んでさえいた。

物言わず鎮座するオブジェを前に立ち竦んでいると、

「ああ、来たのか」

振り向くと少女が駄辺がいた。両手には駅前で見かけたスキーのビニール袋が提げられていた。

「うーん、君の家で合ってるのか？」

「家……家か。そうだね……便宜上そうこうになつてゐるかもね」

「つまり『家』とも言へぬし、『家』とも言へない」

「その通り。君は理解が早くて助かる」

畠辺はいつもと変わらない表情を見せながら、『家』へと向かつた。

「君も来るといいよ。こないだ迷惑をかけてしまったお詫びも兼ねてね」

ぼくは畠辺の後ろについていく。

入口の自動ドアを抜けると十メートル四方のだだつ広い空間の先にまだ閉まつてゐるエレベーターの口があるだけだった。

まるで薄い氷で出来た床を歩くような気分で、ぼくは造られた絶対零度の中を進む。

エレベーターに乗る。

行き先は二十五階。

降りると、十メートル四方空間には変わりないが、その壁には等間隔で扉が据えられている。

畠辺は当然ながら迷うことなく、扉を開け部屋に入った。

「世界が終わるひとしてるんだ」

そう畠辺が言つても、ぼくは特に驚くべき感情を持たなかつた。真つ白な部屋で、真つ白な机を挟んで、真つ白なコーヒーカップを傾けながら畠辺は嘆息した。

「でも私は知らない。知らないところが世界が終わるとしている。
これってとても理不尽なこととは思わないか？」

「と言つても君には興味がない」

「わづでもなこそせ」

畠辺は「コーヒーを飲み干す。

「君だつて今この瞬間にでも地球が滅んでしまえばいいと思つてゐ
んだわづへ。」

「人の心は移り変わりやすいんだよ」

昔の人の言葉を借りるなり、海や山の天氣よりも。
ぼくの顔をじつと見ながら、畠辺は頷いた。

「まあそつと音つたよ」

「でもすぐこいつてわナジやないんだろ？」「

「それは私の決める」とじやない

世界は緩やかに流れている。

ぼくは彼女の出したコーヒーを静かに飲み干した。

その20 可逆

可逆 11/29 日曜

海を臨む堤防。それは学校の屋上と同じ匂いがする。或いは、自然に呑まれた廃墟の匂いだ。

何と言うか、秘されており、黙されているのだ。

「海が近いのは良いことだね。人知の及ばない自然が傍らにあるのは程良い防波堤になる。海に向かつて叫ぶのは何だつけ。『ヤッホー』だつたつけ」

「『バカヤロー』じゃなかつたか？」

「ああ、そうそう。誰が言い出したんだろ？ ね。別に山で『バカヤロー』でもいいのに」

「海の神様は寛大なんだよ、きっと」

「そんなものか」

駢辺はぼくの前を歩きながら、ついと振り返り、いつものように真意が見えない笑みを零した。それは砂のようで、止まることはなく、笑みを『浮かべる』よりも『零す』といった表現の方が適しているように思われる。

やはり儚げであり、幻であり、ベール一枚隔てたところにいるのが駢辺なのであった。

「とは言えこの季節だと少し寒いね」

十一月も間近に控え、今日の最高気温は九度だと聞く。海風も強く吹き付け、流石に彼女はロングスカートだった。

「でも寒いのは嫌いじゃない。虫が出ないからね」

「またみみつちい悩みだね」

「これは深刻なんだ」

特に「ヨキブリ」に関しては未だに半径三十センチ以内に近付けない。この際言つてしまつと家で発生したヤツは全て常夜が始まってくれている。

だけど常夜はセミは大の苦手だと語り。ぼくは素手で触れる。基準が分からぬ。

「どうやら君は私の思つてゐる以上に苦手な物が多いんだ

「ぼくにとってこの世には苦手な物しかない」

「言い得て妙だね」

「そういう生きや生きてなんていられなによ」

だからこそ生きていられる。何故なら人間は不完全だからだ。いつも死を考えられる存在だからこそ、いつも『生きる』ことが可能なのだ。

死を忘れた人間は、もつ正常に生きることはできない。それはこの世の理から外れるとも言つていい。何にせよ、ぼくらと世界を違つて見ることの出来るモノを、人間と呼ぶことは出来ない。

畠辺は立ち止まり防波堤に座る。
ぼくも立ち止まり隣で立ちつくす。

「君は世界が終わることに対する怖くないのかい？」

「大学の単位落とす方が怖いね」

「まあ、君らしい答えた」

太陽が沈む。これもまた一つの『終わり』だ。
だけど全ては循環する。回帰する。『完全な終わり』とは循環の
停止だ。それに怖さを抱くかどうかは全くの別にして。

「前に君に言ったね。私の嫌いなものは三つあると

「ああ。覚えてるよ」

「それよりも実は圧倒的に嫌いなものがある。その後で一番嫌い
と答えた『自分』よりも圧倒的にね」

ぼくは黙る。

彼女が語るのを待つ。
語るのを待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。待つ。

「夜だよ

陽が沈んだ。

その21 束縛

束縛 11／30 月曜

「兄さん、今違う女の子のこと考えてたでしょ」

隣を歩く常夜の声で我に返つた。

「何がだ？」

「何がだ？ じゃないでしょ。言葉の通りのことを言つてるので

「それより腕を絡みつかせて歩くな鬱陶しい」

「話逸らさないで」

その事件の一報は、大学の一時限目の講義が終わり、昼食を食べようと思つた矢先のことだった。

常夜からのメールを要約すると、学校の近くで週末から行方不明だつた生徒がバラバラ死体で見つかったらしく（バラバラかどうかは噂の域を出ない）、急遽午前中で授業を切り上げ下校することになつたことだ。女子高なので大抵の生徒は親が迎えにくるらしいので、仕方なく昼食と午後の講義を犠牲にしてぼくが常夜を迎えにいくことになつた。

何事も優先順位だ。どうせ月曜の三時限目は出席日数が足りている。

「本当に兄さんはアリカシーがないよね」

「身内相手に何言つてるんだお前は」

「もひいこよ」

わざとらしくそっぽを向く常夜。しかし密着させたその体は離れようとしない。最初からそんなつもりなんて微塵もないのだ。そして相手に質問する時はそうであるように、常夜は相手の反応を見て会話するのが楽しいだけなのである。

ある意味において、たまに彼女を連想させた。

……逆だらうか。

彼女と話している時に、無意識の内に常夜が？

「死んだ奴はお前の知り合いか？」

「ううん。三年の先輩。顔も名前も知らないけど」

「そりゃ」

誰かが死んだ。それは非日常を象徴する際たる現象であり、大多數の人間はショックキングでセンセーショナルなそれに歓喜し、狂乱する。

本質的には自分の知らないところで起きている何かに驚くほど敏感である。それが残酷で残忍で残酷であればあるほど。ぼくも、そうだつただろう。

恐らく一ヶ月前くらいまでのぼくだったら。

「まだ死ぬよね？」

「ん？ 何？」

「人」

常夜が笑う。

もう十一月は終わりで、それは十一月が始まろうとしているということ。

たつたそれだけのことであるし、まさしく訪れようとしているわけでもある。

だがぼくには分かる。理解出来る。

『何かが始まるうとしている』

その前触れが。

「そういうことはあんまり外で言つもんじゃないの」

「はーい」

常夜は機嫌良く返事をする。常夜は気まぐれだ。だから気に入っている。

「明日も学校あるのか?」

「ないよ。当分ないんじゃないかなあ。どうから聞きつけたのか知らないけど、もうマスクミとか群がつてたし。アイツらプライバシー無視するから嫌い」

「そうか」

個人的に早く犯人が見つかってほしかった。そうでなければ常夜の呼び出しで大学の講義がいくつ潰れるか分かつものではない。まあ常夜が悪いわけではないのだけれど。

「明日から十一月だね

「ああ」

それは終わりの時期。

そして餘邊ろにかは

その22 天蓋

天蓋 11/XX

「名前は」

朱鷺津茜ときづあかね。女性。十八歳。私立高天女子高等学校の三年生。クラ
スはB。同学校の生徒会副会長でもある。

「何故殺された」

何故？『何故』だつて？それはお前が一番知っていることだ
ろうに。彼女は殺されることは偶然じゃない。それにただの必然じ
やない。必然中の必然だ。『文章テキスト』に書き換えは許されていないし
そもそも不可能なのはお前が知らずして誰が知る。

「通り魔の可能性はないのか」

素手で手足を引きちぎる通り魔か。何とも愉快なことだな。まあ
そんな通り魔がいても、おかしくないかもしないな。もう『何が
起こってもおかしくない時期』に入りかけているのだから。

「そんな殺人的な握力を持つ通り魔には出会いたくないものだ」

「どうせよ、その程度のことはお前には些事か。」

「言つまでもなく」

「うだうだうな。うだううよ。しかしお前が些事に拘ることはないよ

く知つてゐる。だからこそその確認だ。

「ああ。『本質はいつも道から逸れた場所にある』『en』

道理だ。

「……それにしても、分かりやすうことをしてくれる」

全くだ。だからこそ本命ではないと言つてゐるようなものだ。或いは単に飢えた餓鬼かもしれん。そっちの方が厄介だが。

「死体は？」

回収した。死亡時刻は土曜の深夜。今は『喰い者』の範囲を絞り込んでいる。早急にな。まだ一人だけだからスパンも何もありはないが、早ければ早いほど良い。まあ捕まえたところで屠殺体が一つ増えるだけだろう。物言わぬ畜生ほど手のかかるものはない。俺としては放つておいてもいいんだが。

「まだそんな時期ではない。こんなにも秩序が溢れかえつてゐる、こんな状態では」

そう言つのがお前だ。分かつてゐるさ。分かつていたさ。だから捕まえようじやないか。捕まえてやろうじやないか。

「……やり方が露骨だ。気に入らない」

反応を見るんだらう。舐められたものだな。そんなことは通用しないというのに。そんなこと如きでは動じないといつのに。

「だが懶心は禁物だ

お前はいつもやうだな、幻。それが悪いことだと云はるが。
…ああ、全くお前の言つ通りだ。だからこそ、ここまでやつてこれ
た。

「当たり前だ。一度田はない」

ならば予定通りか。

「ああ。まづやくだ。一週間以内に俺も動く

学校は無期限の休校状態に入った。

非日常が侵蝕し、空気が変わった。

空気が変わると言つことは、世界が変わると言つことだ。

朝日が、雲が、鳩が、信号機が、風が、言葉が、思考が、全てが、

だけど、私は変わらないことにした。

そうすることが、抗い。

そうすることができ、生きること。

「さて」

今日もまた対話が始まる。

その23 日常（嘘）

日常（嘘） 12 / 1

「おや、今日はスーツなんだね。就職活動かい？」

「まあそんなところだ」

鈴辺は私服だった。常夜の言っていた通り、昨日の今日と言つこともあり、やはり学校は臨時休校らしい。

しかし至極当然の事の運びだが、世界は一秒たりとも止まることなく動いている。人間一人が惨殺されたところで、就職活動は中止にならないし、大学の授業も休講になつたりせず、日がいつもより早く昇つたり早く沈んだりすることはない。

人間は自分の世界が安寧であれば、それだけでいいのだ。だから子供は台風を待ち望み、信心深い人は世界の終末に歓喜する。誰一人として、次は自分の番であると知ることはないままに。

「暇そうだね」

「家にいててもすることがないからね。それに場所が場所だ。あの近辺を歩いていても通行人より警察の方がが多い始末だよ」

「確かに。かなり閑散としていたからな、あの地区は」

「皆外出るのが怖い連中ばかりだからだよ。完璧な自分達の箱庭を手に入れた末路があれだ。よく都会は、自分の部屋の隣人の顔さえ見たことがない、と対人関係の希薄さを揶揄しているが、あの地帯はその究極だ。まだ『隣人』がいると他人の存在を積極的に知覚

しているだけ、その例え話はマシな方だね

「なかなかユニークな所だね」

「実験都市だからね」

「実験？」

「詳しく述べウチの兄に訊いてくれ」

「まだ一回しか面識ないんだが……」

想像してみる。それはどんな空間なのだろうか。誰もがいながら、誰もがいない。

人の気配はするが、人の『におい』はしない。

誰も言わない。

誰も見えない。

誰も聞こえない。

「よく人体実験は非人道的だと言われるけど、ああいう輩は数えきれない犠牲を踏んできた現代医学の恩恵に『』る資格はないと思うんだよね」

「刹那的なんだよ。誰も彼も」

「田の前の『』としか見ないといつのは、とても幸せなことだらうね

「田の前の『』とから片付けないと生きていけないからじゃないのか

「なかなかまともな」ことを囁つね

「やつとは思わないけどね」

反射的に答えてしまつたが、果たしてどうなのだらうか。
まともだつて？ ぼくが？

まともとは何だ？ 正常だといつことか？

それは間違いだ。正常だがまともでない奴なんて五万といふ。
ではまともでないとは？ それが普通なんぢやないか？

「そんなに免罪符が欲しいのかい？」

「…………」

畠辺がぼくを覗き込む。

酩酊感。

ぼくと世界が『やかしま』になる。

「逆だる」

「ああ。君はやつあるべきだ。そして、私もね」

「あまり先の『』とは考えたくない」

「誰だつてそつと。君の言つ通りにね。だけど、いづれは考えなければならぬ道と考えなくていい道へと分かれることになる」

彼女の言つことをぼくが理解することは、むつ少し時間を要した。

その24 胡蝶

胡蝶 12/20「？」

厭な、夢を見た。

内容は覚えていない。だが、不快であつたことは紛れもない事実だ。おぞましく、いまわしく、慘たらしく、酷く不愉快であり、嫌悪感という嫌悪感を催し、惨憺たる光景を目の当たりにしたかの『ような』、濃い霧を隔てた先にある光景。

これは説明出来るものではなく、感得するものであり、本当の悪夢というのは『なに』うるものではないのだらうかとぼくは思つ。

時刻は午前三時一分。

夜明けまでには、まだ三時間以上ある。

「…………」

最悪な時間に起きてしまつた。

この静寂。硬直した時間。膨張する世界。何もかもが耐えられない。そろそろあの睡眠薬にも抵抗が出来てしまつたのか。この頃眠りが浅い。

頭は冴えている。一度寝は出来そうにない。

ぼくは起き上がり、右手で頭を抱える。ただの重い球体だ。

その時、ぼくの携帯電話が振動した。

「…………」

アラームは設定していない。電話番号にしてもメールアドレスにしても、ぼくは三人にしか教えておらず、その三人共こんな時間に連絡を取つてくる非常識な人間はない。

ぼくは携帯電話を手に取り、ディスプレイの表示を見る。

『着信・非通知』

つまり、ぼくに電話番号を教えたくないわけである。別にぼくが番号を知ったところで何をやらかすわけでもないのだが、少なくとも相手からは無駄な流出を避けたいのだらうといふ疑惑が見て取れる。

寝起きの頭で冷静に分析している間も、電話は鳴り続ける。

十五秒鳴ったところで、ぼくは電話を取った。取らなくてもよかつた選択肢は勿論あつた。だけれど、今のぼくはそれを取ることが最良の選択肢であると思つたからだ。それも感得に至るところなのだつたのだが。

「……もしもし」

声を発する。数年ぶりに発声したような感覚がして、ぼくの声がぼくの声じやないような錯覚に陥る。

返事はすぐにあつた。

「やあ。起きていたのか」

「……………何で君がぼくの携帯電話の番号を知つていい？」

「説明が必要かい？」

「……………不要だね」

「だひひっ?」

世界はそうであるがために回っている。説明はいつだつて不毛なものだ。だから太陽が眩しくて人を殺すことは正当な理由になり得る。

「しかし携帯電話というものは難儀なものだね。有史以来こんなにも人間を縛りつけるツールはかつてなかつた」

「深夜に電話してくる人間がそれを言うか……」

「それもそうだね」

畠辺は笑う。世界のどこかで畠辺が笑つている。それはとても靈びめいており、どこか安心させるものでもあつた。

今のはくにとつては、特に。

髪をかき上げる。額が少し汗ばんでいた。
不快だ。

「それで、結局何か用事でも？」

「用事…… そうだね。用のある事には変わりはない」

一息置き、畠辺は続ける。
ノイズが、かかりはじめた。

「君に関わることでありながら、君は全く関係がない。しかし君は聞かなくてはならない。訊かなくてはならない」

「何をだ」

即答。

「何もかもだよ」

ノイズ。

「懸念せざりつだつた。」

円環 12／参

夢から覚める。果たしてそれは一つの終わりなのだろうか。

「酷い日をしてるね。もしかして君も風邪だとか？」

「変な夢を見たんだ。でも…… そうだな、寝汗で風邪を引いた可能性もある」

「悪夢から覚めるとほつとしたかい？」

「あまり変わらないね。現実の方がよっぽど悪夢だ」

「でもそれは言い得て妙かもしれないよ。誰も知らない、或いは日を逸らしている真実を穿つている」

「……そんなことを言つてた人もいたね」

その人はとても怖い話だと前置きをして語り始めた。

いつもと変わらない日常。平和な日常。長閑な日常。穏やかな空気が流れ、安らかな風が吹き抜ける日常。誰も怯えておらず、誰も不安ではなく、それは完全に理想の『日常』の風景。そんな中に快く身を委ねる自分。そう、『いつもと変わらない』のだから、何も疑問に思つことはない。何も不満に思つことはない。

だが、そこで『日が覚めた』。

それがとても恐ろしいことであつたと。

「成程。それは確かに『恐ろしい』」

「だらり?」

「人間は思つてゐる以上に無知であることを裏付ける良い話だ。鈍感であるとも言えるかもしけないね」

「信じる者は救われる。そうとも思い込まないと、普通の人はやつていけない」

「君はどうなんだい?」

「ぼくは普通の人だ」

だけれど今この瞬間、「これは『夢』でない」、と断言出来る人間が果たしているだろうか。

自分の意識が正常であるかどうかなんて、自分にも他人にも分からはずがない。何故なら、結局判断するのは自分自身だからだ。或いは、誰でもない。

フィクションかノンフィクションであるか、議論する」とすらナンセンスだ。

「『鶏が先か、卵が先か』を思い出すよ」

「生化学的には鶏が先らしい」

「しかしもつとマクロ的な意味合いで見れば、答えは出るものじゃない。何しろ、始まりも終わりもないんだから」

「輪廻転生というヤツか」

「別に宗教は関係ないんだけどね」

畠辺は「ブラン口」を漕ぐ。

ぼくは傍らの鉄柱に身を預ける。

錆びれた鉄同士が擦れ合い、歪んだ音を立てる。

空は紅い。

雲は一面に零れた紅色の絵の具を取り、ぼんやりとした朱色を浮かび上がらせている。

空気はシンとしており、風に運ばれてくる寒冷な匂いが心地良い。雪は、まだ降らない。

「

少し眩暈がした。

満月と同じよつて、紅ずきる夕焼けは見ていて、気分が悪くなつてくる。

前にも眩暈を感じたことがある。

どこで？

「まだ犯人捕まらないみたいだねえ」

「やつぱり学校なかつたら退屈なのか？」

「学校？まさか。あんな無菌培養施設なんて本当は一回だつて居たくないよ。兄様が言うから行つて」

「兄様？」

「

「…………」

「私は変化を求めてるだけさ。始まつてしまつたからにはね」

瞬邊は「ラン」を降り、長い影を携えながら遠ざかっていく。

その夜、一人目の死体が発見された。

その26 壺中

壺中 12／參（裏）

「意外に早かつたわね、二人目」

「そう？ 私としては十分想定の範囲内ださどな。殺ろうと思えば出来たけれど、やっぱり万全を期したいし」

「じゃあ次を狙う？」

「出来ればね。そろそろ向こうも動くだらうし、まさか全く進展がないわけじゃないでしょ。私達と同じ、虎視眈々と獲物を追い詰める手合いよ、アイツらは。とりあえず、泳がされているのに気付いてないのか、何が来ても返り討ちに出来るほど自信があるのか…どうちかは知らないけれど、三人目はそう遠くはないことだけは分かるかな」

「なら、今日から寝ずの番ね。長い夜になりそうだわ」

「ゴメンね杏梨。これに関しては頼ることしか出来なくって

「いいえ、気にすることはないわ。貴女は、自分のしなければいけないことだけを考えてればいい。私がそのために万全を期すのなら、貴女もそのために万全を期さなければならない。私が願うところは、貴女の悲願の達成なのだから」

「ありがとう杏梨。分かつていてくれてうれしいよ。だからこそ、私達はここまで待つた」

待つ。それは単純にして困難を極める行為。

私は待つた。まずは第一段階はクリアだ。次は第二段階。勝つ。必ず。

そして、兄さんに寄りつづく全てを排除する。この手で。完膚なきまでに。

「範囲は穂都万市全域でいいかしら？」

「十分」

「一応最高密度で連続80時間稼働だけれど、貴女としてほどなくらいに動くと予想する?」

「……今から40時間から50時間が山かな。とにかく『巣』に引っ掛けた時点で早急に連絡頂戴。ただ殺すだけじゃなくて、アイツらを出し抜くことがある意味第一条件なんだから」

「ええ、分かつていてるわ。その点は任せてもうって構わない」

絶対にアイツらより先に辿り着く。そうでなかつたら、意味がない。

兄さんは私のものだ。世界がどうなろうが知ったことではないけれど、『私の』世界を壊すこととは他の誰であろうと絶対に許されることがない。

それが例え世界そのものであれどとも、私は何でもしてどうにかする。

「落ち着いて。また血が出てる」

「あ

言われて氣付く。また鼻血が出ていたようだ。

「今から興奮していたら世話がないわよ。もつ少し制御を覚えた方がいいわ。貴女は貴女だけなんだから」

杏梨はいつもと同じ、抑揚のない、感情のない、機械のようであり、人形のようである声で、私を安心させる。
兄さん以外で私の側に居ていいのは、杏梨だけ。
その所以だ。

「それじゃあ、一時間後に『起動』するわ。その時まで、自愛しておいて」

「ンククツ、信頼してるよ、私の杏梨」

「ええ、『だから』貴女が好きよ、常夜」

夜は更け、月が昇る。

『夜』は始まつたばかりだ。

白黒 - 幕間 -

哀愁漂つ香ばしい秋の匂いを吸い込みながら、薄く黄金に染まつた陽光を浴びて私は歩く。

私はこの時間帯が一番好きだ。微かに聞こえる潮騒、遊具で遊ぶ子供達、談笑するお年寄り、車の音、自転車の音、ベビーカーの音。それら鱗割れた音、全てが穏やかで愛おしい。

たおやかな風が吹き抜ける度に、私は目を閉じて思う。

それは過ぎ去った時間であり、これから来る時間。

それはセピア色であり、ゆっくりと流れれる。

あっちに行つたり、こっちに行つたり。

何ものにも干渉されることはなく、シーソーのように規則的な運動を繰り返しながら。

まるで $= 42$ のようだ。

「好きな作家は?」

「カミュと梶井基次郎」

ほらまた、そこにも旋律が。

分かつていてると思うが、それは音ではない。言葉から一元的な連想しか出来ないのはいけない。幹からは無数に枝が伸び、そこから更に無数の葉が出てくる。そのような行為は、世界を小さく見てしまっている。

世界は大きい。決して「広い」ではない。私達は内包されているのだから。そして私自身なのだから。

ほら、『また』だ。

だから私は独りだつたんだろうか。別にそれを苦と思つたことはなかつたが。

ただ、少し寂しいな、とは思つた。私も人間だ。支え合つ関係にはなりたくないが、せめてキャッチボールくらいはしたいと思ってはいた。

ふうつ、と風が吹く。

私は靡く髪を押さえる。正直鬱陶しい髪の長さだったが、兄様が黒髪ロングは譲れないとかわけの分からないことを言つので、仕方なくそのままにしている。

「長くねえか？ その髪」

「君もそう思うのかい？」

「傍目から見たらな」

「いつも君は自分の意見を持たないね」

「自分？ 自分とは何だ？ それが『俺』と何の関係がある？ どうせ全部は『一部』でしかない。そのような思考、大海に浮かぶ泡沫より儂いものだろうな。下らなくはないが……徒労だ」

「……詩人だね」

「『俺』はそう思わないけどな」

回転。循環。連鎖。日々昇り沈み、起きて眠る。

私達は閉じ込められている。いや、私達が『閉じ込めている』と勘違いしているのだろうか。

だから、憂いてしまう。私の世界から、私の宇宙から見たら、こ

んなにも瑣末事だといふのに。

一秒にも満たない刹那に、人間が何を思えると言つのだ。

「もう四時か」

「……あまり私の前で時間の話をしないでほしことの前も言つたと思つんだけど」

「何言つてゐる。時間に縛られないで何が人間か。腕時計持つてない奴は人間失格だと思つぜ、『俺』は」

「時間を忘れたい時だつてあるんだよ」

「逃避か。まあそれもいいかもしらんが、『俺』は『反動』とやらが苦手でね。だから常に知つていて必要があるわけ」

「そんな石橋を叩くような毎日で疲れないかい?」

「石橋を叩く? そんな馬鹿なことする奴とは知り合ひにすらなれそうにはないな」

時間は過ぎる。四時が来ると言つことは、五時が来ると言つことであり、六時が控えていると言つことでもある。
だから私は、時計が嫌いだ。

一年前の話。

まだ私は『彼』を知らない。

その27 黄昏

黄昏 12 / 3 - ?

誰そ彼？

暗い。どこまでも黒に塗り潰され、一寸先も見えない。果たして、一寸先には『前』があるのかどうかすら。昏い。眩み、昏い。何も分かることはない。だが全てを掌握している。どちらも窮めれば辿り着くこととなる。冥い。一つの終わり。先には何もなく、何もかもが広がっている。内は外であり、外は内となり得る。

漆黒の中には二人の人間。

白と黒だ。

だがどちらも『黒』であることには変わりはない。

光の中にこそ影があり、影があるからこそ光がある。

玉座のような椅子に座る白の背に向かって、黒が蕭々と言葉を投げかける。

「放つておいていいのか？」もう手遅れ故、こうして疑問を投げかけるのは由無し事だろうが、早ければ明日には影を踏まれることになるぞ」

「…………何のことじゃ？」

「毎回詰つのも飽きるものだが、私は言葉遊びが好きではない。それに私は待たされるのが嫌いだ。貴女の意見を率直に聞きたい」

「…………言つて今更どういづ出來ないのは分かつておひづに。余から直接判断を仰がないと不安なのかな？」

黒は　円上神威^{えんじょう かみい}は黙つたまま、白　月見坂愛^{つきみざか あい}の返事を待つ。
彼は嫌いなことを進んでやる。そういう男だった。

「仮にも其方は代行、特に余の意見などいらぬのではないか？」

「部下の不始末は貴女の不始末だ。私はただ、与えられた下命をこなすだけだと言つことは、最初に言つたはずだが」

「……全く、其方は変わらぬな。ああ堅苦しい。そんなので人生退屈せぬか？」

「それは貴女が一番よく知つているはずだ」

世の中の万物は変わりゆくものだと信じてゐる者が多いが、それは間違いである。

あらゆる『何か』が『どうにか』なつても、変わらない事象が、明らかに永久不变と言つ名の特異点がこの世界には存在するのだ。世界は、宇宙は、あらゆるものを作り出している。『ここ』ではただそれが通じないだけの話。

説明するまでもなく、それは瞭然たる事実なのだ。

愛は立ち上がり、振り返る。ヴェールのような、しかし威圧感すら醸し出す、ボリュームのある金髪を靡かせながら。

その表情は凜。神威の肩にも届かぬ身丈なれども、世界の全てを相手取つてゐるよつた瞳が彼女の全てを物語つていた。

「零式くるはどちらにせよ激突する。早いか遅いかだけの話じや。それが明日であつても、一年後であつても、千年後であつても、然

したる差異ではない。加えて言つなら、『何処で』、も一緒に。問題なのは付隨される結果。そして『それから』。其方なら、十分対処し得ると思えるがの」

「……恐らく今宵も殺すに違いないことだけは分かる。やつしたら三人目だ。今のアイツは気が立つていて。止められることはあっても、止まるとはないだろ?」

間髪入れず、白く透明な声が確信めいた調子で踊る。

「すると、『止まる』であるうな

「それなら、彼女にはやはり礎に?」

「礎……まあ呼び水と言つたところかの。彼奴の誰がくるるに』『そう』させるかは分からぬ。もしやもすれば相手に戦意自体あるかどうか懸念があるが、十中八九杞憂に終わるじゃらうて」

「貴女は心配しそぎだ。アレらは必ず来る。今日があつて、明日が来るよつて」

「何を言ひ。心配することは生きているとの証じや。日々常に憂いを忍ばせておく」というが、世界を呪うに値する天の器よ」

愛は嘘うそ。

それはいつかどこかで見た嗤い。

まるで鏡のように、そこにはもう一人が映つてゐるかのよつて。

「しかし、面白い。嗚呼、これは『面白い』。これは周あまねが戻つてくるまで、退屈せずに済みそうじや」

「彼女はまだ」「へ。

「さてな。大方まだ受肉しておらぬのだな。まあ特に心配はしておらん。あ奴はあるべき時に来る。そつ分かつてあるからの

さあ、こと小さきもの共。余を楽しませておくれ。充たしておくれ。

これで最後にするつもりじゃから。よもや簡単に膝をつこうとするわけはあるまい。

生けるもの、往けるもの、逝けるもの。遙か彼方へ、彼岸へ。余へと、彼へと、靡ぐがよい、曳かれるがよい。導かれるがよい。自我を、渴望を、欲望を、偏痴を、困窮を、憤怒を糧に。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。待つておるぞ。予定調和など、余興にすりなうのだから。

「では、完璧な征服を始めるとじょうか

円見坂愛は詠うように宣言する。

そしてこの時点を以て、完全に幕が開いた。

黎明 12/40④ ?

大学に行くと門が閉まっていた。

「……そりゃそうか。敷地内から見つかればなあ……」

大学に友人がいないとこいつ時に辛い。この大学に来てから休講等で無駄足を踏んだ回数は両手では数えきれないほどである。一人だけ在学生で知り合いがいるが、もう半年以上連絡を取っていないし、物凄く飽きっぽいのでもしかしたらとっくに退学しているのかもしねり。

このまま門の前で立ち往生していたら馬鹿みたいなので、ぼくは踵を返し来た道を戻る。

朝の人の往来の波を逆らって歩く。皆、目的地を目標として歩く。皆、目的を持つて歩く。それはとても幸せなことである。この上なく。

階歩いている。時には段差もある。それは生きているところでもある。それ故に、ぼくも辛うじて生きている。

ぼくはどこに行くでも無く、とりあえず駅へと歩を進める。現実的な話すると、帰ったところで常夜に家事を手伝わせられるだけだし、畠辺の家は既知であるにしても、ぼくがそこに行つたところで畠辺に会える確証はない。

そもそもぼくらは通常そんな風に会うべきではないし、恐らく会うことはないのだろう。

そんな関係。そんな縁。そんな因果。

あらゆる糸が交差し、重なり、絡まり合つ中で、ぼくは生きてい

る。そう、ぼくは。

だから

予期せぬことなど、ない。

そう思っていた。

のだが。

「

」

「キヒツ」

ぼくが『なにか』と擦れ違った、

瞬間、

世界に罠が入つた。

「あ」

刹那の内に何もかもがこの場から遠ざかっていき、また元に戻る。しかし、それはもう決して同じものではない。

乗っている電車がトンネルの中に突入した時のようになり、急に水中に頭を埋めた時のように、一瞬周りの音が瞬時に遠ざかっていき、別のものに変化する。

感覚でもあり、知覚でもあり、ぼくはそれらに身を任せて咄嗟に膝を折った。

「痛つ」

風が。

ぞひゅ。

ぞひゅぞひゅ。

『ぞひゅ』。

屁ぐ。

ぼた。

ぼたぼたぼたぼたぼた。

それは確かに音だった。調べだった。響きだった。旋律だった。

しかし、明らかに、聞いたことも無い、日常から外れた相応しくなく、吐き気を催すような『不協和音』。

滑稽で、

木戸にへなへなとまじめを仰て、さうか。不思議で何を落とせば、こんな音が出るのだろうか。出てしまつたのだろうか。事実、それは出てしまったのだ。

ぼくは、こんな音を聞きたがために生きたいのではない。

悲鳴が弾ける。絶叫が弾ける。怒声が、泣声が、喚声が、男の声
が女の声が子供の声が老人の声が
列が乱され、幼子が紙を無秩序残酷に引き千切るようにして安寧
は破られる。

۷

ぼくは立ち上がる。

咲き乱れる椿の中、ぼくは佇む。

視線の先には、狂気が居た。

「ナニシタナニシタ」

ニット帽、サングラス、マフラー、長袖長ズボン、手袋、ブーツ。徹底的に肌を隠すその服装から唯一覗くのは、口。

怒っているようで、泣いているようで、笑っているようで

「ほいくつもの感情が同居していた。

りも明るい闇が蠢いていた。

百足が這ひぬるに、蛇が蠍(アシガヘビ)しているかのよう

一目見て分かる。アレはヒトの目をしていない。

あんなに妖しく光る球体を、眼球といつのは間違っている。

「……クソ」

視線に縫い付けられる。だからと言ひて動けないわけではない。
ぼくが憂いでいるのはいつだつて今より先のことだ。
行動は、常に主体的でなければならない。

だけれども

「みつけた」

脳に直接響いてくる。もしくは、直接響いてるのが脳なのか?
『みつけた』と言われたのならば、ぼくはおれりへ『みつけられた』
のだろう。

まるで白痴のような表情を浮かべながら、ソレは愉しそうに口端
を一層吊り上げる。

周りはまだつるさい。ぼくがそう感じているだけのこともしれ
ない。しかし、正直なところぼくは静かな方が好みだ。

ソレが足を踏み込む。前進、跳躍の構え。ソレはぼくから目を逸
らさない。標的がぼくであるのならば、成程考える必要がある。応
える必要がある。

ぼくは右足を前に出した。
が、

「ツー?」

明確に『何か』を感じした仕草。ソレは弾かれたよつこ、顔をぼ
くではないどこかへと上げる。

そこからは一息だつた。

消えた。

「…………？」

いなく、なつた？

事実目の前からはそのままの、あるべきものがある世界へと戻っていた。今のような、どう見ても『外れている』ものはそこにはなかつた。

すう、と感覚が戻る。

気付くとぼくは何人かに話しかけられていた。しかし聞こえない。

聞こうともしない。取捨選択は大事だ。

息を吸う。今何が起こったのか。

落ち着け。自分を発見しろ。見失うな。

「つ…………」

心臓の鼓動が乱れている。こんなことは初めてだ。故に異変が始まっている。

「…………」

ぼくは走り出す。

相変わらず何も聞こえないままに。

とにかくこの場所に留まつてはいられない。

その29 深奥

深奥 12 / 40 ④ ?

静寂は破られた。

それはつまり、『天』の亀裂を意味する。
故に、侵入が始まった。

「意外にせつかちな奴だな。駅前の往来でやらかしてくれるとは。
流石にここまでやられたら隠蔽もクソもあつたもんじやない」

携帯電話を片手に、氏咲は煙草を咥えながらぼやくよじにして言う。目の前のテレビに映し出される番組は、どの局も臨時ニュースで非常に慌ただしい。仰々しいテロップが踊り、現場とスタジオの映像が目まぐるしく切り変わる。三十分ほど前からずっとこの調子だ。

白昼堂々、ほぼ同時刻、広範囲に亘り数十人単位で人の首が飛んだのだ。加えて犯人は未だ不明ときた。あまりに奇妙極まる『現象』に、テレビ越しから現場の混乱がありありと窺える。

それにしても

「全く、懲りないねえ。どこの世界も」

人。人。人人人人人人人。何と氣味の悪い『つながり』だらうか。

哀れだ、と氏咲は思う。何故こんなにも滑稽な光景しか映らないのかと思うと、溜息の一つくらい吐きたくなると言つものだ。しかし、『現象』そのものに関しては、氏咲は久々に感情が動いているのを自覚した。

だから『thos』が動き出したことは最早疑いの余地なく火を見るより明らかだが、この暴挙には少なからず氏咲も眉を顰めざるを得なかつた。

あの男なら、尚更である。

「」りや一週間も腰を据えてる場合じやなくなつてきたかもしけないな。何考えるのか分からるのは重々承知の上だが、ちょっとあればはしゃぎ過ぎだ。そう思つてゐんだ。この『俺』が

「.....」

テーブルに置いてあるカップにブラックコーヒーを注ぎ、一口飲んで氣を落ち着かせる。

「多分『those』としては、モルモット一匹放つた程度の認識しかないのだろうさ。大体無差別殺人なんて真似、あまりにも程度が低すぎる。だけれども……あの女なら、やりそうなことだ」

「.....」

「ああ、言つたのを忘れていたが、彪には既にスタンバつてもらつてるから、お前の指示を出し次第出動出来る。さて、どうする?」

「.....まだだな」

きつかり五秒の沈黙を守り、幻はあくまで妥協的に答えた。

重苦しく、軽々しく、厳格に、鷹揚に。

最初から決まっていることだからこそ、十分に吟味する幻の性分を知る氏咲にとつては、それは驚くことでも驚かないことでも、要はどちらでもなかつた。

まるで、煙草の煙を吐くのと回じよつなことだ。

「『J』の程度、『J』ちらとしてはまだ観測するくらいで丁度いい。たかだか人間が数十人死んだくらいで、秩序はそう簡単に乱れない。発現したことで既に通常ではないことは分かるが、『J』れ』はまだ正常の範囲内だ。それくらいは、分かるだろう?」

「ふつ……そういうことだな。そういうことに違いない。まさしく正常。言つ通りだ。オーケー。それじゃ、観測レベルをもう一段階上げるとしようか

と、そこへ氏咲は感付く。

あらゆるシチュエーションにおいて、沈黙は語りかけてくるものだ。特に、幻の場合はそれが顕著であるので、氏咲にとつてはある意味言葉を用いたそれよりも雄弁に感じることがある。

それが今であり、そして今であった。

「……いや、だが好きにやつていいぞ。俺は動かないだけだ。お前と彪の二人なら大概の奴に太刀打ち出来るだろう。俺が出るのはあの三人の内いづれがか現れた時だけだ。……だが、万が一、兆が一、ソイツらがお前達の前に現れたら、とにかく連絡を寄こせ。それ以外は知らん。勝手にやつてくれ」

「はあ……でも一週間以内には出るとか言つてたけど、やじるといどうなんだ?」

「『J』の調子で行くと『やつなる』。『やつならない』場合は『やつならない』場合でしかない」

「了解」

そう氏咲が言い終わるや否や、通話は切れ、無機質な電子音がこの世の終わりの残滓のよう、氏咲の耳に、体内に、宇宙に、土足で進入する。

あまり一方的に電話を切られることを快く思わない氏咲は、こればかりは仕方ないと諦めつつ一人肩を竦める。

相変わらずテレビはCMも挟まず延々と現場の生中継を流している。

『ああ、気持ち悪い』。『だから何だと叫ぶのひどい』。

氏咲はテレビを消し、代わりにCDコンポの電源を入れる。グノシオンヌ第一番。ただそこにある家具のよう、忽ち旋律は部屋に浸透する。

待ち受け画面に戻った携帯電話を再び操作し、耳に当てる。

「…………もしもし?…………ああ、まだ動かなくて良いとのお達しだ。とりあえず引き続き『姫』の護衛を頼む。もう少しの辛抱だ。…………は? 金がない? こいつ前渡しだらうが。…………お前これを期に食事回数減らせよ。体重増えない謎は置いとくとして、一日七食は異常だ。仮にも女だ。もっとなんかこう色々考えるよ。…………ならとりあえず一時間後に【291:32:47:102】だ。……ああ、健闘を祈る。汝に我らが母の加護があることを」

通話を切る。彼女はちゃんと節度を持つて空気を読んで通話を切るから好感が持てる。彼女に対する好感と言えば、それともう一つだけだが。

ソファーに身を沈める。顔には出さないが、氏咲は少し疲れていた。
そうだな……かつ……やるべきことば……田の前にあり、気が付いた時に訪れる。

家具の音が渦巻く。

どうせもうすぐ畠[ぬ]恋[な]しに混沌[こんとん]になるのだ。今から一時間[べらいじゆう]くらい心を落ち着かせていても、世界はまだ回[まわ]る。
もうすぐ当たり前が当たり前でなくなってしまうのだから。

その30 降下

降下 12 / 40 ④ ?

手に兇器をもつて人畜の内臓を電裂せんとする兇賊がある。かざされたるところの兇器は、その生あたたかき心臓の上におかれ、生ぐさき夜の呼吸において點火發光するところのぴすとるである。

しかしてみよ、この黒衣の曲者も、白夜柳の木の下に凝立する所以である。

『蝶を夢む／柳』 萩原朔太郎

「どうしたんだい？ そんなに急いで」

「そうだ。ぼくは何をそんなに急いでいたのだらう。何をそんな急ぐ必要があつたのだらう。」

言われて初めて気付いたような錯覚に陥る。それはあくまで錯覚であり、ぼく自身がそう感知したかどうかは別物なのだ。つまりは、やはり『誰が観測しているか』に依る。例外はない。

「急いでたかな？」

「ああ、これ以上なくね。まるで世界が終わりそうな顔をしていた」

「実際そつなんだろ」ナビ

「なり尚更だね」

世界は本当に終わるのとしているのだ。

変化とは勿論目に見えるものばかりではない。寧ろ五感で感じる変化など所詮その程度であり、この世は見えないもので満ち溢れている。変化は常に物事の裏で起こっていることをもつと知るべきなのだ。

無論、気付いている人間は気付いている人間なりに活動を行う。多分それはまた、普通ではないのだろう。

「.....」

「どうしたんだい？　君が黙り込むなんて珍しい」

珍しい？

珍しいとは何だ？

珍しいとはどういう意味だ？

「多分そういう尺度では測りきれないようなものだと想う」ナビ

「秩序だよ。君も分かっていると思うが、世界は整列されなければならない。整列とは静寂だ。今起こってしまった事件も、君の沈黙も、その対極に位置する」

「静寂」

君は。

何をひじまで知つてこるところのだろうか。

ぼくの心中をよそに、畠辺ろにかはいつものようだ微笑を絶やさない。それが彼女であつて、他の何者でもない所以でもあるのだろう。

…………『いつも』のように？

違う。もう変わつてしまつていて。第六感でさえも感じ取ることの出来ない事象が、ここには確かにあるのだ。

ならぼくは、前に進むしかない。

だが、畠辺はぼくの心中を見透かしたように話す。

その目は透明であり、硝子であり、虚無であつて、全てが凝縮されていて。

そして彼女は言つだらう。ぼくは知らねばならない。

畠辺は髪を靡かせて振り返る。ぼくは立ち尽くす。立ち尽くす。

「さて、何を知りたい？ もうアレらが動き出したんなら秘匿義務も何もかもあつたもんじやないからね。動いていいものは何もおらず、全てのものは『何処か』に向かつて収束しているのは確かだ。それにもう、アレらに接触した君は一般人じやない。まあ元々一般人ではないことは変わりないんだけれど。ならば、故に、知らねばならない。いや、知ることしか君には選択肢は残されていない」

「…………」

ぼくは少し思案する。これまでのことを。これからのこと。を。知らねばならない」と。

「とりあえず訊きたいんだが、ぼくは襲われなければならなかつたのか？」

「襲われる？ 何に？」

「え？」

「あれ？ いきなりそういうアクション？」

出鼻を挫かれた感じがして、変に緊張していたぼくは力無く息を漏らす。

どうこうことだらう。彼女がそういう反応を示すと、不安になる。それは彼女も同じよつで、珍しく眉を顰める仕草を見せた。

「いや、ちよつと待つて。……違う。違う。……変わっている？ ……干渉か」

ぶつぶつと口の中で対話を繰り返している。自分と自分で、問答を繰り返している。

それは打ち寄せる波のよつこ、ざわめきだつたり遠ざかつたり。やがて、一点に定まる。

「……そつか。そつか。そつかそつか。だからか

それは面白がつてこるように見えたが、ぼくが初めて見る表情でもあつた。

一息置いて、餘邊は愉快気に口端を吊り上げる。

「分かった サイ、それじゃ行こうか」

「は？ ビル？」

「『全て』に、だよ。それを君も欲しているんだろう？ ……兄様には悪いが、事情が変わった。これからはちよつと私のやり方でや

らせてもらおうかな。と言つた兄様も人が悪い。いつまでも子供扱いさせられる身にもなつてほしいものだね」

鰐辺はドアを開ける。それより先は光が、はたまた闇か。

「因みに訊くが、車の運転は？」

「出来るナビ」

「上出来だ」

ビルには地下があった。
地下には車があった。
ただそれだけの事象。

「『やう言え』、アレ、りつて連呼してたけど、何のこと言つてるんだ
？」

「気になるかい？」

「『やう言え』のに対しても、ぼくは敏感なんだよ」

鰐辺はぼくの言つたことを一から九くらい今まで理解したような顔を向けて、若干口元を綻ばせる。

やはり彼女はそうでなくてはならない。

「『やう言え』

そう鰐辺は言った。

単純明快に。

複雑怪奇なものややの 一 壁に押しつぶされ。

「世界を染め上げようとしてここに連中だよ」

その31 怒涛

怒涛 12/40「4 ?

迂闊だった。しかし、今更それを悔やんでも仕様がない。時間は流れるものだ。それを止めることは私には叶わない。

まさか、とは言つものの、今となつてはこちらの失態と認める他なく、悔やんではいる時間すら一秒たりとも無いのが現実だ。

「杏梨」

「『巣』に異常あらず。正常稼働。転送座標の誤差はゼロ。速度は現状維持で支障無し。接触まで残り一十七秒、二十六秒、二十五秒……」

機械のような杏梨の思念波を感じ、私は少しばかり安堵する。彼女の冷静な声こそが、旋律こそが、私にとって最たる安定剤になり得る。

そして瞬時に血が滾るのを認識。

思考よりも身体が意識を先行し、一が一に、二が四に、四がハに、イメージが泡のように沸き立ち、発狂寸前まで神経が鋭敏且つ凶暴になっていく。

兄さんがあの強襲を躲したのは偶然でも運でも何でもない。あれこそが兄さんの本質。無様に首を飛ばされ散つて逝った登場人物にもなれないその他大勢とは、存在の根本から違う。それが兄さんだ。だが、そうであると分かつても、アレの犯した罪は決して赦されるものではない。

「殺す」

心臓の鼓動が呪詛の響きを携えて私に延々と囁く。それは止まることがなく、まるで輪唱のように相乗効果となって私に暗示をかける。

アレは兄さんに手を出した。だから死ななければならない。

どんな理由があつても、それによって世界が滅ぼしども、『やつてはいけない』ことは確かに存在し得る。

それが私にとっての普遍事項。それはあらゆる不条理を無効にする最大の道理。

「大それた真似してくれるじゃない ツ」

感情的になるのは悪いことではない。寧ろ私にとってそれは麻薬であり、あらゆる感覚を過敏なまでに研ぎ澄ませてくれる。

どうやら『天庭』の奴らを出し抜くという考えが裏目に出てしまつたか。ここまで向こうも表立った動きを見せないところからして、別の思惑があるのだろう。それか、泳がされている……？

「だけど、今はどうでもいい」

何にせよ先手を取つたのはこつちだ。このアドバンテージを逃す手はない。

「残り一秒」

杏梨の報告と同時、人気のない路地裏を駆ける標的の背を捉える。距離にして五十メートル強。一息で詰める余裕の間合いだ。加えて相手よりも私は高所に位置する。既にお膳立ては万端だ。そしてきつかり一秒。

「ツ」

全ての音を置き去りにして、最速を以て標的へ接近。

何の慈悲もなく、何の憐憫もなく、何の躊躇もなく。

1936年1月号

腕を拡げて目の前で標的が四散する。その四散した欠片が更に四

散し、その四散した欠片が更に更に四散四散四散四散四散四散四散

龍溪先生全集

しかしすぐに気付く。

「つ！？」

すぐさま、まだ脳内に焼きつく幻を振り払い、感覚の外にある勘を総動員させる。

目を閉じる。その方が『見える』から。

ああ 見える。歪みが。異質が。サーモグラフィーに浮かび上がるかのように。それは『ここ』にいてはいけない故に。

視界の届く範囲でなくとも、この種には三万種からの異質を感じ取ることが出来る。

「あいつ！」

背後に手を伸ばし、掴む。果たして手応えはあり。私に不意打ち

の効果はあつても、攻撃が通るかは別の問題だ。

チクッと頬が裂けた感覚。だがそんなの痛みの内にも入らない。その気になれば痛覚をシャットダウンすることも出来るが、それすら及ばない。

指の先端まで余すところなく、その一瞬だけ全力を入れる。そして寸分のタイミングを逃さず、その勢いのまま力任せに地面へと叩きつける。

轟音。

瞬時に路地裏が砂塵で一杯になる。

ビルの非常階段に着地し、その有様を俯瞰する。

「まだよ」

「分かってる」

刹那の内に意思疎通を終わらせ、息の根を止めるべく標的へ最接近。もう幻術は効かない。

コンクリートが盛大に捲り上がり、砂埃が濛々と舞つているが、今の私にはそんなこと関係無い。『見える』 のだから。

「解析済んだ?」

「零式くるくる。新顔ね。だからと言つて油断は禁物よ

「私が油断? 新しいギャグ?」

「そのままそつくり返すわ」

途端、周囲の温度が一気に下がる。勿論感覚的なものに他ならぬが、鳥肌が立つたからと言つてそこから一歩も動けないわけじゃない。

寧ろ正常な危険信号。私の身体は私が一番理解している。

ああ『見える』。前後左右上下から無数の鋭利な刃物が私に標準を合わせているのが。だけど、

「トロいし物量不足ね

「確かに」

放たれると同時に、その場から飛び降りる。

防御はしない。戦闘において最も大切なのは目的を見失わないことだ。

故に一点突破。ジャケットやスカートが破れ、身体中に切り傷が出来るがそんなこと知ったことではない。

瞬時に集中。静寂を創り出し、疑似的に時を止める。

「 捉えたッ！」

壁を蹴り、軌道を修正。弾丸のように標的 零式ぐるるの元へと直行。

今度こそ息の根を止めるべく、先程引っ抜いた非常階段に設置されていた転落防止の鉄格子を一本、零式に投げつける。

投げつけた時の風圧で砂塵が完全に晴れる。一本は弾かれたが、もう一本は零式の腹部を貫いているのを確認。
そしてトドメ

「 !?」

.....

「…………油断は禁物つて言つたじやない」

「…………してないって」

「結果が全てよ」

「まあね……」

アレは全力ではなかつた。そつ認識してしまつたからには、結局のところ慢心なのだろう。

では次だ。

私はまだ赦していない。

万死に値する罪の償いはまだ始まつてすらいない。

「杏梨」

「ええ。それじゃ、次のフェイズへ移行しましょう」

その32 上層

上層 12 / 40 ④ ?

「……全く、手のかかる『姫』だ」

何もかもは田の前に現れる。前触れない。そして川の流れのように、穏やかに、しかしどこか無秩序のまま進んでいく。

だから初対面だからと言って、フィクションでよくあるように自己紹介から始まるわけもなく、ただそのまま受け入れることだけが推奨されており、許されている。現実はそうなのだ。隣の誰かも知らないところから、物語は始まる。

前だけ向いていればいい。それは決して『前向き』な言葉などではなく、普遍の真理である。

そこから世界は開ける。

「で? どこに行けばいいんだ?」

「……もう少しの間適当に走らせといてくれ。ガソリンは満タンだから、ガス欠の心配はしなくていい」

「適當ねえ……難しい注文だ」

「行き先がどうじても必要かい?」

「あまり目的も無くうひうひするのは趣味じゃないんだ」

「人間らしいね。人は無意識の内に行き先を定めないと生きていけないようプログラムされている」「

車に備え付けられたFMラジオからは、まだ引っ切り無しに例の『現象』の臨時ニュースが流れている。まるで正常に壊れたオルゴールのように。

言われるがまま車を走らせること十数分。歩くのと違つて車で彷徨うように移動するのは実際やりにくいで、とりあえず今は行きつけの堤防へと向かっていた。

そこからどうするかは知らない。

ぼくは今、海を見たい。

それだけのことだ。理由なんて、志向性なんてそんなものだ。

畠辺はさつきから助手席で忙しく携帯を弄つていて。『何』をしているかは分からぬが、『何か』をしていることは分かった。メール……ではなさそうだ。調べ物だろうか。どちらでもいいが。キャスクエットに隠れて彼女の表情までは読み取れない。それにしても帽子が良くなじみ。

ぼくは無駄な思考を止め、少しだけ力を抜く。

それに一生じりしているわけでもないだろ？ 結局はどこかへ行き着く。

「一つ、訊いていいか？」

「どうぞ。私は何も拒まないよ」

手前で信号が赤になる。

ブレーキを踏み、車が静かに減速する。

「何にせよ、ぼくらはどこかへ着く。それ自体はどうでもいい。問

題は、ぼくにそれが関係あるかどうかだ

「君に、それが、関係あるかどうか」

畠辺は、田隠しして口に含んだものの味を確かめるように繰り返す。

「関係、ねえ」

笑み。キャスケットから覗く流し田でこちらを盗み見るようなその仕草は、ミステリアスで、妖艶で、複雑怪奇であった。
返答に窮している、というわけではなさそうであるが、言い淀んでいる感が滲み出ている。それとも、ぼくが理解できていないだけか？

「関係がなかつたら、知りたくはないのかい？」

「極力はね。何事も、過ぎたるは猶及ばざるが如し、さ。ぼくが一般人であつた場合でも、一般人でなかつた場合でも、ぼく自身の主觀は揺るがないし変化しない。そんな超越的な場からの干渉なんて受けたところで、面倒だし扱いに困る」

信号が変わる。アクセルを踏む。微弱な慣性がかかり、背凭れに身体が押しつけられる。

これだって分かつていること。それは便利であり不自由である二重背反。

問題は、青であるのか、緑であるのか。

「成程。まあそれでも君の意思が尊重されるとは限らないんだけどね」

「…………」

「正直なところ、これは緊急事態なんだ。私にとつても、君にとつても」

「まあ逼迫しているのは理解出来る。その、『those』ってやつらのせいだ」

畠辺は頷く。

「その通り。世界を終わらす、つてのは比喩でも何でもないんだ。彼らにとつてはね。初期メンバーは五人だが、十中八九数は増えているだろ？　あれから十年も経っているから」

「あんなのが五人以上……？」

本当にアレがどこまであの『現象』に関わったのかは理解の及ぶところではないが、少なくとも人間離れた『何か』を持っているのは疑いようのない事実と捉えて良いだろう。

現時点では被害者は六十三人であり、これからまだ増えるだろう。ギネス記録も間近だ。

「…………こんなところでドライブに興じていいのか？」

「おや、柄にもなく焦つているかい？」

「分からぬ」とは怖いんだ

「まあ道理だ」

とは言え今のぼくは畠辺についでいく他ない。ぼくをやつせたのはぼくでしかないが、一旦舟に乗るとすぐには降りる」ことが出来ないのも道理だ。

「でも何とかする。そこのところは安心してくれていい。当面はね

畠辺は一つ折りの携帯を開じ、一息吐いた。

「そんな君に朗報だ。行き先が決まった

「(1)数時間で一番ホツとした気分だよ」

畠辺は身を乗り出し、カーナビに住所を素早く入力する。目的地がすぐに画面に表示される。そこはここから一時間ほど走らせた場所だった。

思いつきで県外である。

堤防とは逆の方角だった。

適当なところでターンすれば、カーナビの声に従い目的地へと淡々と距離を縮める。

「うつと遠いな

「車で一時間なんてあつてこう聞む

やつ言つてシートに身を委ねる。

「それに、今はここから離れた方がいい

「緊急事態だから?」

「それも、ある」

暫くして県境を示す標識の下を潜る。
畠辺は助手席でうとうとし始めている。
未来は肅々と展開を見せていく。

その33 越境？

越境 12 / 40 「4 ? - 1

遠くに行く、という行為は精神を安定させる。見知らぬ土地は自分をリセットさせ、あらゆる枷から一時的に解放される『コード』が埋め込まれているからだ。

だからぼくは旅行が好きだ。電車で移動するにせよ、車で移動するにせよ。徒歩で移動するにせよ。

ぼくが完全といつても差し支えない程度に落ち着きを取り戻した頃には、もう目的地は田と鼻の先であったが、この辺は道が入り組んでいるようで到着まではあと少なくとも五六分はかかりそうだった。

雰囲気は駒辺の住んでいた区画と似ており、同じようなマンションが乱立しているが、ここはまた別の『におい』がした。

空が曇っているからだろうか。少し雨が降りそうだ。そのせいもあるかもしれない。

今何時だろう。どうでもいいことが一瞬頭を過ぎる。
どうでもいい？ 今何時であることが？

「馬鹿馬鹿しい」

自分の置かれている立場を多角的な視点から確認するのは必要なことだ。ましてや、現在時刻なんて最たるものであるのに。
思考がまとまらない。

「ん……ふあ……着いたかい？」

駒辺が目を擦りながら欠伸交じりでぼくに訊ねる。

「もう着くよ」

ハンドルを右に切る。あと一回左折すれば到着だ。と言つてもそこがどんな所なのか知らないので、目的地が近付いているという実感はない。住所ではその一点を示しているが、そこに行つて何をするかさえぼくはまだ知らない。

知らないことだらけだ。だがそんな悪い気はしない。

人はいつだって新鮮さを求めてている。

既知は、毒だ。

退屈が薬であるのと同様に。

「ところで君、自宅に未練はあるかい？」

「うん？」

自宅？ 何だつて唐突にそんな質問を？

「自宅がどうしたつて？」

「いや、もう帰れないかもしけないからさ」

「……はい？」

その33 越境 ?

越境 12 / 40 ④ ? - 2

「……あれ？」

「どうしたの？」

おかしい。

ドアを開けてすぐに異変に気付く。

何故帰つてきていない？ あんな事件に巻き込まれた後だと言つ

のに。

玄関に靴はない。兄さんに靴を靴箱の中に入れる習慣はないので、家にいるのならばすぐに分かる。

それにもう昼過ぎだ。今朝に私は兄さんに昼ご飯はいるかどうか訊いた。兄さんは数秒思案して、じゃあ頼む、と答えた。兄さんは安易に約束を破つたりしない。だから私には兄さんしかいない。リビングへ移動する。誰もいない。当たり前だ。靴が無かつたのだから。

いよいよ『おかしい』。こんなこと、予定にない。

「…………杏梨、『巣』を起動。大至急兄さんの現在地を補足して」

「了解」

心の中で舌打ちする。どうしてあの後兄さんの動きを追わなかつたのだろう。完全に『throse』の輩に目を奪われて失念していた。そうだ。それよりも、あれよりも、大切なことを、大義を見失つてどうする。

自業自得であるが故に、行き場を無くした苛立ちが蟠る。心がざわめき立つ。無事であることは言つてもないだろ？が、やはり想定外の事態に陥ると安心は出来ない。十数秒後、杏梨の目の焦点が合いつ。

「補足完り　あ

だが、その言葉は不自然に途切れ。すぐ口の句を継がない杏梨。また想定外だとでも言つのか？

「？　何か問題発生？」

「　ロスト」

「何？」

ロスト。見失った。つまり

「穂都万市から外に？」

「ええ。今まさに、ね。明らかに徒步のスピードじゃなかつたわ。自転車でも無理があるわね。となると」

「家に車やバイクなんてないんだけど」

「なら誰かのでしきうね」

「誰か　？」

拉致られた　可能性は捨てていいだろ？。何しろ兄さんだ。そ

んな普通の人間のような過失は犯さない。故に脅されて云々の可能性も然りだ。これは、十中八九兄さんの意思によつて行われている。兄さんの意思？ それはつまり、『場の流れ』がそうさせているとこうこと。

今兄さんと接触し得る人間は限られている。その中で一番可能性のある人間 炙り出すのにそんな時間はいらない。

「……何それ」

「力 ログ」

「レログ？」

「兄さんの携帯の位置情報とか電池残量とか通話記録とかが分かるアプリ」

「え……」

隣で私の『iPhone』を覗き見ながら絶句している杏梨を放つておいて、とりあえず兄さんがどこにいるかを大至急調べる。

「そんなのあるんなら、別に私の『巣』での検索いらなかつたんじゃないの？」

「何言つてるの。これは兄さん専用なんだから。『those』が近くいたり、そういう副次的検索は貴女にしか出来ないんだし」

見つけた。

やはり……あの女か。

餘邊ろにか。

想定は収束した。ひとまず安心と詫ひたところだらうか。

「えりへ遠出したわね。県外じゃない」

ディスプレイに表示された地図に浮かぶ、兄さんを表す点滅する赤い印を見て、杏梨が呟く。

「でも、追跡不能な距離じゃない」

「今すぐ出発?」

「勿論」

その33 越境 ?

越境 12 / 40 「4 ? - 3

「あ、ここで止めてくれ」

目的地に着き、車を降りると一瞬ぼくは田を疑つた。
以前訪れた畠辺の『家』と全く外見が変わらないビルが、そこに
は聳え立つていた。

「狐に化かされた気分なんだけど」

「じゃあ多分狐に化かされたんだね？」

車を隣のモータープールに停め、畠辺の後についてビルの中に入る。

ロビーは相変わらず無機質な『箱』だつた。昔、数人の無関係の人間が無数の『箱』の中の一つに閉じ込められて、その迷宮から脱出しようとする映画を見たのを思いだした。まだここから自由に動けるだけ、ぼくらはマシなのかもしない。

どこかうそ寒い空気を感じながら、エレベーターに乗る。

三十一階。二十秒もかからずに到着。本当にこれは上へ向かっているのだろうか。下に向かつていたとしても、ぼくは何ら不思議には思わない。右だって左だってそうだ。ぼくは軽く田眩を覚える。

エレベーターのドアが開くと、真っ白な空間の突き当たりにまたドアがあつた。

ドアの前にはメイドがいた。メイド服を着ているのだから、それ以外に何を連想すればいいのだろう。

畠辺よりも明らかに年下のメイドは、優雅な仕草で、しかし精密

機械のような動きで、お辞儀をする。

「お帰りなさいませ、ろにか様」

顔を上げると、ウエーブのかかった前髪の隙間から覗く三白眼がぼくを射抜く。

「ただいま、ヴァネッサ」

外人のようだった。

物語はそうして歪みながら、しかしどうしても進んでいく。後戻りはもう出来そうになかった。

その34 白磁

白磁 12/6

出る杭は打たれる、と言ひ。だからぼくは出来る限り目立たないよつに生きてきた。そう直観はしているし、幾分間違いないことでもある。

しかし、物事現象風習空氣は両端に延びる。それは、目立たないことは目立つことを意味していた。そして目立つことは当然目立つことだ。

誰に？ 誰にでも。いつでも。どこにでも。

結局どこに行つても逃げることは叶わなかつたのだ。それなら最初から諦めるという選択肢もあつたが、それはそれで馬鹿馬鹿しい。どこの世界に迷路の入口を出口と勘違にする知的生命体が存在するだらうか。

息が詰まる。

閉塞感。

何故、ぼくを見る。

何故、ぼくを。

何故、『ぼく』を

「おこ、わざわざ起きたのーーー」

ヴァネッサの幼げなハスキーボイスでぼくは目覚める。発見という程のものではないが、彼女はぼくと餘邊とで態度が全く違う。彼女と出会つてから時間にして半日も経つていなが、ぼくは罵倒における無限の可能性を見出しつつあった。

ベッドから降り、独房の『よつな』部屋を出て、リビングの『よつな』リビングに顔を出すと、畠辺が既に朝食をとっていた。

「の部屋には、いや、おそらくどの部屋にも、窓はない。それは外が見えないところだ。故に時間が分からない。あらゆる基準は自然からもたらされる。それなのに今が午前八時一分であることが、十一月六日であることが、一〇〇九年であることが、『三度目』であることが分かるのは、この部屋の壁に無秩序に無作為に無数に掛けられた時計が証明している。

ぼくは創られた時間を漂いながら席に着く。

広いテーブルを挟んで、畠辺の向かい側の席に着く。

「君結構起きるの遅いんだね」

「ぼくにとって午前中は朝なんだよ」

ヴァネッサが朝食を運んでくるので、彼女が作ったのだろう。メイドだけあって、文句のつけようがなかった。

セミロングのストロベリーブロンドを翻しながら部屋を後にするヴァネッサを眺めつつ、ぼくは畠辺に訊ねる。

「で、『これ』はどうことなんだ？」

骨董品のようなティーカップを口元で傾け、畠辺は挑戦的な目付きでこちらを見る。

まるで事実はぼくの背後にあるとでも言いたげに。それもまた事実なのだろう。

「とりあえず応急処置というわけだ」

「応急処置」

「そり

「つまり問題はこれからだ、と」

「やはり君との会話は『つながり』が淀みなくて感動すら覚える」

「餘辺は足を組んで、手を組んだ。そして両肘をテーブルに置いてぼくを見据える。

「知つての通り、ここは『狭間』だ。どこにでもあって、どこにもない。故に私の常識内では何の干渉も受けない。完全な対策にはなつていなかろうが、今言つたように応急処置にはなつてゐる筈だ。私が創つたものだからね。目眩まし、といふヤツだ」

「あのヴァネッサって娘は？」

「うん？ 気になるかな？ まあどうとこいつとはないよ。少し前に私が拾つた吸血鬼の成り損ないだ。頓着することもあるまい」

……余計ややこしくなつた氣もするが、それもまた氣のせいだろう。世界は思つてゐる以上に広い。吸血鬼の一人や二人いなくてどうする。

一つ確かなことは、あの謎のターミネーターからは一時的に身を隠している、ということくらいだろうか。餘辺の様子から見て、おそらくこれは絶対的に安全なのだろう。特に理解する必要はない。起こつていることをただ受け入れればいいのだ。

だが、それで納得するかどうかは別の話だ。

ヴァネッサが音も無く部屋に入つてきて、餘辺の側につく。ぼくの方には田も呉れない。

彼女達は小声で一言一言葉を交わす。

「ふうん……じゃあ、アレは捨て駒といつことかな？」

「恐らくは。場を引っ搔き回す程度の存在ですね」

「君の目から見たら？」

「人間離れしていますが、所詮『人間』です。『those』全体から考えるとただの雑魚でしょう。無論、私にとつても」

「良い答えだ」

何気に自信たっぷりと答えるヴァネッサを見ていると、ふと田が合つた。

「何見てんだ肩」

彼女は二重人格なのだろうか。

「じゃあ引き続き観測を頼もうかな。いつだって場を制するのは大局を制するものだからね」

「あ、それともう一つなのですが」

ヴァネッサは畠辺の耳元に口を寄せる。

数秒後、畠辺の表情が静かに変化する。どういう風に変化したのかは分からぬ。それは雰囲気のかも分からぬ。とにかく、何かが『変』わった もしくは『変』わらうとしていることは確實であった。

ぼくにさえ感じ取れる。畠辺にとっては、心の内で奔流が湧き起
こっていても不思議ではない。

そして、田が細められる。

「全く。君は私を退屈させはしない」

一人の女がぼくを見据える。

無数の時計のどれかが、鐘の音を鳴らし始める。

今何時であるか。やはりそんなのはどうでもよかつたのだ。

その35 追跡

追跡 12 / 6 i?

みんな変わる。みんな変わる。
そしていなくなる。

『不明』不明

八時間前。

「これは……ちょっとお手上げね。位階がズレてる。空間転移くらいならどうにかなるだらうけど、流石に私にどうこう出来る代物じゃないわ。まさか座層まで操作出来るなんて……こんな捻曲がった空間に無理矢理干渉しようとしたら存在 자체が消滅しかねない。残念だけど、作戦を練り直す他ないわね」

「そう 分かった。お疲れ。とりあえず駅前で合流しようか」

「了解」

杏梨との通話を一旦切り、私はマートのポケットに両手を突っ込んで空を仰ぐ。

空。私の場合それは漆黒だ。いつだって空は黒い。海が青いのなら、空はその対極でなければならない。故に月は穴だ。月が人を狂わせるのはその所以だ。

吐く息が白い。そう言えばもう十一月だった。

この前の十一月はどうだったんだろうか。……いや、そんなものは

ない。ないものはない。私の十一月は『この』十一月でしかない。
ならば、ここできつちり終わらせなければならない。そのためには
待つたのだ。十年も。
それにして……

「……意外に積極的だつたなあ」

畠辺ろにか。まさかここまで強硬手段に出るとは、少しばかり予想外だった。一応同じ学校だつたこともあり、それなりに人となりは分析していたのだが、所詮上辺ばかりを見せられていたようだ。正直彼女の行為としては、まだ何も知らない兄さんの身の安全を考慮すると決して間違つてはいないのだが、如何せんスタンドプレイに走っている節は否めない。

そもそも彼女のバッグには『天庭』があるのだ。それに頼らなければ、そこを見ると、どうやら向こうは向こうで軋轢が多少なりとも生じているのだろう。

『天庭』は『天庭』で、別の動きを見せている。それがブラフならば、それはそれだ。味方の少ない私達には、前を向くことで精一杯なのだから。

畠辺幻。あの男も素性が杳として知れない。元『天庭』だつた杏梨でさえ、その素顔すら見たことがないほどだ。メンバーや抜ける時に当時のデータベースを根こそぎかつぱらつて来たにも関わらず、トップの彼とナンバー2である彼の旧友とされる氏咲松久の情報だけほぼ皆無に近い有様だと聞いている。

「ま、今んとこ敵と言えないだけまだマシか……」

決して味方とも言えないのだが、そんなことを考え出したらキリがないので思考を強制的にこの辺でシャットアウトする。

今はとにかく、目先の問題を考えよう。

つーかそんなことより兄さん自身のことだ。畠辺さんに拉致られた兄さんは少なくともこの晩確實に家に戻らないだろうと諦つことは場所はどこであれ一人で一晩を共にするってことになるイコールつまり故にならばいい歳した男女が兄さんとあの女が兄さんが兄さんが兄さんが私の知らないところでの私を差し置いてこれから長い夜の間アレをナニしてどうなつ

「…………」

近付くバイクのエンジン音。

減速しながら私の横で止まり、杏梨がフルフェイスを取つて髪を振り乱す。

「ふう……お待た……せ……？」

「あ、お帰り」

「…………どうしたのそんな殺氣立つて」

「氣のせい」

「や、やつ……」

よく分からぬが多少顔を引き攣らせている杏梨はさて置き、私はこれからのことを考える。

考えることは大事だ。この十年間、料簡に料簡を重ねてきたのだ。瑣末なことですから、私は考える癖がついてしまった。

「杏梨から見れば、現時点手立て無しのお手上げ状態つてわけか」

「そうね。何もしないよりはマシ、とはよく言つけれど、アレは何かしたところでこっちに危険が及ぶだけね」

「ううか。『なら』

「強行突破とかわけの分からぬ奇行は止すことね。言つておくれど、貴女と彼女とではまだ能力の開きに無限の差がある」

「…………まだ何も言つてない」

「意思疎通つて言葉知つてる?」

「便利な言葉だこと」

「そつけないことね」

私は溜息を吐き、再び空を見上げる。
相変わらず、不気味な金色の眼が私達を、世界を、見下ろしていった。

「けれど」

地上に目を戻す。

あまり聞かない、力強い声で杏梨が続ける。

「八方手詰まりになつたわけじゃないわ」

登場人物ver.2 and 作中用語

登場人物みたいなもの

畠辺ろにか（あらたべ ろにか）：少女。世界を統べ、世界に殺される。全にして無。天の器なる者。

霧江五樹（きりえいつき）：青年。万能。友達皆無。Kyrilos.

畠辺幻（あらたべまほろじ）：五樹の妹。五樹こそが世界。五樹の連絡先を知る人物その1。

氏咲松久（うじさきまつひさ）：ろにかの兄。旧支配者。『天庭』総領。第一の天。

椿彪（つばきあや）：幻、松久の旧友。世界に捨てられた女。

価々無杏梨・常夜の手足。常夜の愛人。元『天庭』メンバー。

ヴァネッサ・オルベラ・ろにか専属メイド。不完全な吸血鬼。

零式ぐるる（ぜろしき ぐるる）：白紙の終焉者。『those』
序列10位。

又迦己祓幸哉：悪魔になつた人間。地獄そのもの。『those』
序列7位。初期メンバー。

凰鹿那岐・プログラムされた創造者。矛盾。『those』序列6

位。初期メンバー。

すめらぎ
皇周：愛の左腕。魔女。『those』序列4位。初期メンバー。

円上神威^{えんじょうかむい}：愛の右腕。人間でもなく神でもない異物。『those』

序列3位。初期メンバー。

月見坂愛^{つきみざかあい}：ろにかと対になる少女。世界を呪つ。現『世界』支配者。

『those』序列1位。初期メンバー。

用語

『天庭』：餘刃幻率いる前世界での生き残り集団。目的は『those』の壊滅。

『those』：月見坂愛率いるこの世の理を外れた異能力軍団。目的は『天庭』の壊滅。

『霧江一族』：イレギュラー。第三勢力。

その36 軌道

軌道 12 / 6 i?

深夜 時

胸騒ぎ、とは決して氣のせいなどではない。あらゆる知生体は万象とアクセスしており、要是意識をそこまで意図的に潜り込ませることが出来ないだけだ。ただ多大な影響を及ぼす事象振動が発生した時、まれにその揺らぎが最上層の意識レベルにまで届くことがある。

そんなわけで俺は起きた。

部屋は暗い。いつしか日は暮れていた。

同時に電話のホール音が、コンポから流れるメトロノームのようなピアノ音を無粋に踏み荒らす。この時点で俺は不快を感じる。電話がかかってくる。それは俺にとって不吉の予兆でしかない。いかなる時でも。

電話は期待と共に取るべきではない。

「もしもし」

相手は彪だった。

「何だ? 食費なら毎月渡しだらう。まだ食い足りないはいい分かった。分かつたから食いながら喋るな汚らしい。とりあえず要件を言え。手短にな」

彪は言われた通り手短に、的確に、用件だけを告げる。俺は彼女のそういうところが気に入っている。要望に応えてくれる女は良い女だと相場は決まっているのだ。

「 そうか。…………少し面倒だな」

口ではそう言つてはいるが、知らず俺の口端は釣り上がつてはいる。俺は深く息を吸う。

やはり 絡んできたか。キリエの眷属共。

全く、こちらが意図しなくてもシナリオを引っ搔き回してくれる。幻も困つた奴らを相手に回したものだ。

「 ……ふん、あの女のガキか。……早いものだな、もう十年経つか。えらくジャストタイミングで動いてきたものだな。なかなか根に持つタイプか？ あのガキ」

いや、もうあのガキも立派な女だろう。人間の幼年期から青年期における十年は世界を変える力にすらなり得る。現に彪の監視によると、『those』の一人と一戦交えたようだ。恐らくは、あの首切り魔だろう。

どこの馬の骨とも知れない奴ではあるが、『those』であることは疑いない。彼女がアレラと対抗し得る力を備えるまでに成つてゐることに、俺は込み上げてくる笑いを静かに抑える。

…………面白くなってきた、と言えば幻は不愉快に思うだろうか。

ああ、これだから思い通りにいかないことは、生の実感だ。

俺は今生きている。

さて、次は何が起ころる？ 何をしてくれる？

「 ん？」

一瞬、世界が凝固するのを感じる。それは彪にも伝わったようだ、たつた一語だけだがめったに出さない俺の困惑した声色を受けて、一段と声を低くして訊いてくる。

俺はドアを見る。この部屋と外界を繋ぐ唯一のドアだ。
凝視。

……何だ。

何だ何だ。

それで隠してこらつもつなのかな?

「…………ああ、氣にするな。とりあえずこれで通信は一旦切るが、最後に伝えておく」ことが発生した

立つ

どうやつて、といった疑問は最早愚問だらう。あらゆる事象は為るよつに為るしかない。誰もがそう想つ時、初めて世界はもう一つ上の段階にシフトすることが出来る。

全てを押し並べて受け入れることで、よつやくスタートラインに立つことが許される。

さあ、お前はどうだ? 彼は? 彼女は? あの は?

そして、俺は静かに告げる。

「甲種限定解除だ。引きつけるから速やかに対象を見つけ次第排除
しき」

同時、ドアが音も無く十字に切断される。

瞬時に四片と化した鉄屑が、一秒を十ほど刻んだ時間差で、弾丸の速度を以てして俺の方へと飛んでくる。

「 ッ

迷う」とはない。

腕を伸ばす。最初に到達した一辻を、粘土を掘むよつとして手に馴染ませる。

五指を喰い込ませ、捕らえる。

あとは弾くだけ。簡単なことですらない。

右に。

左に。

上に。

一秒の十分の三の出来事。

それでも余りある時間ではあることは言つまでもなかつた。外界と隔てるものがなくなつた、そのドアのあつた空間から、長身瘦躯の赤髪のそれは顔を出した。

現人惡魔。地獄の具現者。永久凍土。

叉迦己祓幸哉。

「よう、久しづりじやねえか。まだこんな////しきことしてんのか？ 飽きねえ奴だな。哀れすぎて泣けてくるわ」

「……第五位はやつぱりパシリか何かみたいだな。こんな所まで御苦労様なことだ」

叉迦己祓は十年前と全く変わらない表情で、邪悪な顔を更に陰険に歪ませる。

「はっ！ 相変わらず口の減らねえ野郎だ。そんなんだから、俺に執着される。 因みにもう第七位だよ。上にバケモンが一辻も入つちまつて」覧の有り様だ

「ほお……」

上に一人……ときたか。

やはりあの時とは全然勝手が違つてゐるようだ。やはり千里眼の価値々無を見す見す逃がしてやつたのは間違いだつただろうか。ウチには他に適役の人材がいない。

「一位も下げるられたとあつちや、」愁傷様だな。それでも月見坂の支配から逃れ得ないお前の方が、よっぽど哀れで救い様がなさそうに見えるが」

「ああ……そうだな。そつだそつだその通りだ。いいねえ、お前。やつぱり分かつてゐる。お前だからこそ、分かるんだろうなあ」

「にしては嬉しそうじやないか」

「ああ？ ああああ、そりや当たり前だわ」

トントン、と爪先で靴を鳴らす。

旋律だ。

それは合図であり、記号であり、精神であり 行動だ。

身構える。

動作は、すぐに来る。

「こうしてクソイラつてメェをやつと縊り殺して溜飲を下げるこ
とが出来んだからよオー！」

ズン！ と振動。

そして気持ちのいいものではない浮遊感。いや、実際に浮遊している。

床が崩れていく。

世界が、抜け落ちていく。

俺にもよつやく、終わりが幕開けたようだ。

「じゃあ、あの時の続きをしようつか」

崩れ切つて落下していく床の瓦礫の向こうから、あの時を想起させ
る声が響いた。

その37 進展

進展 12 / 6 ?

「さて、整理をしよう」

腕を組んだ餘邊はぼくを見据える。

もう時間の概念について、ぼくは考えるのを止めた。改めて見ると、壁時計は全て違った時刻を指している。針が逆回転している時計もある。最初に入った時、ぼくはどこで　いや、どうして具体的な時間を見たのだろうか。

それはやはり、囚われてこる」とに他ならない。ぼくはこの期に及んで、まだどこかで秩序だった具体を世界に求めてこよつだつた。

「この場では最早、そんなことは何の意味も持たない」とを頭の片隅で理解しながら。

「長らく待たせて済まなかつたね。けれどあまり悪く思わないでほしい。こうなることも既に前々から予想済みだつたんだ。加えて、予想済みだつたことも既に予想済みだつたこともね」

「ああ」

分かつている。全て分かつている。

ぼくは頷く。頷くことで、全てを理解し、掌握する。

「今現在、宇宙、もとい　世界　の座をかけて一つの勢力が闘ぎ合っている。それくらいは知覚しているだら」

ぼくは肯定を無言で以て返す。

「IJの世界は三度目らしい。『らしい』とは私でさえそこまで正式に情報権限が与えられていないのだが、まあその辺は軽く聞き流してくれていい。問題は『今』だからね。どうであれ、いつであれ」

「…………」

「勿論他人間は認知どころか違和感すら覚えていない。当然のことだらうね。彼らは 少なくとも私達の基準で『普通の人間』に分類される知性体は 誰一人として先立つて己を認識したものはいない。この世界の常識だ。恐らく君もそうであるだらうけど、実は違う。君は意図的に『逸らされていた』のだから」

「 とりあえず、簡潔に言つと……」

ぼくは早々と守りから攻めに転じた。正直畠邊に話の進行役を一任すると、宇宙の寿命が尽きてもまだ本筋から逸れた話をするに違いない。ぼくはそれを本能的に感じ取った。

ヴァネッサは相変わらず畠邊が座る椅子の脇で、優雅に佇んでいた。メイドたるもの、立ち居振る舞いからして様になつていなければならぬ。ぼくの目から見たら完璧の域に達していた。ぼくは昨日の いや、ここでは敢えて眠る前の、と言つておこう 第一印象で、中学生くらいの見た目故に少し小馬鹿にした顔付きで見てしまつたことを、心の中で詫びた。

「 ッ

睨まれてしまつた。

「その一つの勢力つてのは、『those』とかいうのと、君らの集団なわけだね？」

「……正確には、私の兄が仕切つてる組織だけだね。『天庭』。一番田の世界の生き残り集団さ」

畠辺幻。

一度だけ会つたが、正直生きてるのか死んでるのか、動いているのか止まっているのか、生か負なのか良くな分からぬ男だったのを覚えている。

畠辺は少し表情を歪ませている。珍しい兆候だ。

「正直なところ、私もこの世界での記憶しかない。全ては兄が仕切つていてる上に、私にはあまり喋ろうとしてくれない。ただ一つ言えることは、前の世界は滅びた、という厳然たる事実だね」

「……護る側に関しては、あまり疑問を持つ余地はないんだけど…：結局『those』って何なんだ？ 何をしようとしてることすら分からぬのか？」

畠辺は足を組み直し、物憂げに溜息を吐いた。

「『天庭』の排除。私が知るのはこれくらいだ。何にせよ、この世界の最後の防波堤は『天庭』に他ならない。彼らが破れた時が、三度目の世界の崩壊に繋がるだろ?」

成程。荒唐無稽もいいところの話だが、実際筋自体は通つていて。そこには矛盾がない。それだけで、出来事としての整合性は取れている。

ぼくは頷く。物事なんてものは全体の一パーセントでも理解出来

たらしいのだ。

「分かつた。『thos』と『天庭』が世界を巡つて戦つて
いる。オーケー。」ここまでいいとしよう。臣歩譲つてね。だけど

ぼくは再三思い巡らせていたことを言葉に乗せる。

「だからぼくは何なんだ？」

「…………」

全く関係ないわけではないのだろう。大小あれ、この世から関係を持たない存在などいない。関係を持たないということは、即ち存在しないことに繋がるのだから。

かと言つて、このぼくの境遇はどうことだ。

畠辺はぼくを見る。先月、初めてぼくに会つた時に、ぼくに向けられた視線を、ぼくに向ける。

「……霧江」

畠辺が、初めてぼくの姓を発音する。何故彼女が知つてゐるかどうかなんて、この場では愚問にするならない。

「私はこれでも一つの人間だ。誰かの傀儡であることなんて、死んでもゴメンだ。君はどうだい？」

急な問いかけに、ぼくは戸惑つ。誰かに操られていることだが、だつて？

そんなもの……良い気がしないのは確かだ。けど、どうして畠辺が……？

畠辺はこの時だけ、今まで見せたこともないような口付きて、ぼくを見た。鋭くもあり、諭すようでもあり、縋るようでもある口付きを。

ぼくは混乱した。

ぼくは出来る限り他人の思いを背負いたくないのだ。

「いいかい？ 」の先、あらゆる対象が君に干渉してくるが、いつだって自分の思うように行動するんだ。それが数秒後なのか、何万年後だらうか分からぬが、決して忘れちゃいけない

な、にを

「はつきり言おう。君は切り札だ。有象無象が崩壊し果てても、君だけがそれを『破算』にすることが出来る。それまで、自分の全てを誰にも委ねないことだ。それが例え、誰であつても」

畠辺は席を立つ。

ぼくは座つたままでいる。

「ろにか様、そろそろ 」

「分かつていい」

ぼくに背を向けていた畠辺は、そこでもう一度振り返る。

「だけどね、私はシナリオ通りに動く気も、せんせんない」

そう言つて、相対するものを強いて飛ばすよつた、いつも笑みを浮かべた。

そのXX - ?

XX - ?

『Wer mit Ungeheuern kämpft, mag zusehn, dass er nicht dabei zum Ungeheuer wird. Und wenn du lange in einen Abgrund blickst, blickt der Abgrund auch in dich hinein.』

『Jenseits von Gut und Böse』 Friedrich Wilhelm Nietzsche

年前。
どこか。

そう。深淵はいつだつて在つた。そして俺は呑まれた。それ以来俺は『覗き込むもの』であり、『覗き返すもの』になつた。

深淵は無限に広がつてゐる。それは人間という宇宙の塵芥の更に塵芥にすらならない、存在というのも馬鹿らしい存在にとつてしてみれば、理解の及ぶ範疇でないことくらいは想像に難くない。と言つよりも、理解しようとしたその瞬間、思考が焼き切れて気が触れてしまつうだらう。

深淵は方向すらない。絶えず膨張収縮しながらも、決して止まることはない。或いは常に停止している。あらゆる概念が、不定形の

まま散らかっている有様だと言つていい。

闇が途轍もない質量で何もかもを押し潰す。深淵に呑まれた者は、その瞬間闇と同化してしまう。その後は何も残りはない。そう見えるだけかも知れない。そして、深淵は数えきれないほど商業を呑み込み、咀嚼し、嚥下し、濃い闇を更に濃くしていく。

その濃度に限りはない。全ては無限。無限は包括せざるものはない、またあらゆるものを拒絶する。何故なら生も負も、『それ』にとつては一緒だからだ。

俺は呑まれた。そして、俺は同化した。

その瞬間、悟る。これが俺の在るべき姿であったと。これが俺の為すべき姿であったと。

ああ、そして悟る。なんと醜いことか。全てを見渡せる位置に立つて、ようやく気付く。気付かされる。

五月蠅い。煩わしい。雑多すぎる。何故この世界はこんなにも色に満ちているのだろうか。一人が一人であることに、どれだけの意味がある？

俺は那一瞬の内に悠久の歴史を見た。そして今までの何億倍にも膨れ上がった思考の奔流が、俺という存在を絡め取る。

「…………黙目だな」

「ここはまだ、完成していない。俺は直感した。

ならば、正さなくてはならないだろう。

正す？ 否、均す。

そうすることで、何かが見えるだろうか。

知り得たい。

俺はこのまま終わる存在なのか？ これが全ての果てなのか？ 最果てとは、こんなにもつまらないものなのか？

終わりが始まりに繋がるものであれ、それが真の終わりであれ、俺はこのまま終わらせるつもりなど毛頭ない。この意思がどこから噴出するものかは分からないが、これが深淵の意思であると思えば

納得もいく。

彼も　俺を待っていたのだな。
故に

「　邪魔だな」

そして俺は侵攻した。

これ以上、俺が望まざる世界を見せられるのは我慢ならない。

年後。

俺は天を滅ぼした。

しかし、その代償は大きかった。

その38 課題

課題 12 / 6 i?

時間は前後しない。

ここで起こっていることは、『今』と『現実』を支配していること以外に何も意味を為さない。

「一つ言つておくわ」

杏梨はパズルの最後のピースをそつと並べ嵌めるよつとして、付け加える。

「今から会いに行くのは『天庭』の実質N.O.3、私の『元』上司なんだけど……少し性格に難ありだから、くれぐれも刺激しないよう頼むわよ」

「そんな発作持ちみたいな扱いしなくて……どうかにせよ私は面識ないんだから、交渉は貴女に一任してるし。 で、大丈夫なんでしょうね。その女は」

気持ち一オクターブ声の音程を下げ、私は訊ねる。

杏梨の言つことなのだから、間違はないのだろう。しかし私は正直焦っていた。焦りと苛つきは紙一重だ。無力感は知性体の持つ感情の中で最も自我にダメージを与える。

兄さんが私の日の届かない所にいる。それは明らかに異常事態であるし、私の世界が閉ざされていることを意味していた。

畠辺ろにか。貴女はある意味で正しく、ある意味で間違っている。だけど、杏梨は私の心境を見通したように、淡々とした態度を見せる。

「ええ、私の知る限り、多次元干涉技術において彼女の右に出る者はいない。時間制限付きだけど、多世界移行すら出来るスキルも持ち合わせているわ」

「へえ……『天庭』にもそんなのがいるのね」

「あれはあれで人外魔境なのよ。私もね」

珍しく杏梨が自嘲的な笑みを零したところで、私達は立ち止まつた。

始発から電車を二回乗り換え、バスで三十分。私達の前には特段大きくも小さくもない教会が鎮座していた。私はキリスト教徒ではないが、教会というのはその敷地内において異界を発生させているものだと思っている。神聖な場所、即ち聖域は確かに存在するものであり、いかなる形式を持つても、それは正負問わず人間のような影響されやすい普遍的法則を司ってしまう者としては、それこそ超自然的を感じざるを得ないのだろう。

斯く言う私も、そうであった。そうであらねばならないのだ。『だから』早く兄さんを取り戻さないといけない。

「ほつ、何やら面白いことになつてゐるじゃないか

教会の扉を開けると、途端に女性の声が飛び込んできた。連なる長椅子には、一人の女性がこちらに背を向け座つている。

「 ッ！」

瞬間、私は立ち止まる。

まるで『全てを見透かしたような』。私はこのような表現は気持ち悪くて用いたくないのだが、この時私は確かに背筋が凍る思いをした。

第六感も超越した感得。当然言葉になど出来る筈もない。言語で語り尽くせるものではない。それは在るものでありながら、決して掴むものではないのだから。ただ背を向けているだけなのに、私は彼女の全てを感じ、そして何も抵抗することが出来なかつた。

ただそこに存在し、存在し続ける存在。私はこんなにも完成された人間を初めて見た。

これが『天庭』の第三位……。

彼女は立ち上がり、ようやく私達と相対する。

タートルネックにジーンズといつラフな格好でありながら、彼女に対する所感は変わることはない。

「やあ、そこの君は初めてだね、霧江常夜さん。ボクは寿蓮華じとぶき れんげ

といつ者だ」

「……何故私の名前を？」

「ん？ そりやボクは君の兄さんの先輩だからさ。聞いてなかつたかな？」

初耳だ。

この私が、こんなことを見落としていたなんて俄に信じがたい事実に、眉を顰めざるを得ない。

「ま、君にもまだ限界はあるってことだよ。恥じる」とはない。寧ろ未だ世界を見渡せることに安堵すべきだ。成長とは恐らく君が思つていてる以上に大事なものなのだよ。発展途上の女の子ほど先行きが楽しめるものはない」

何やら危険な発言が飛び出した気がするが、私はそろそろ間が持ちそうにないので会いコンタクトで杏梨に助け船を求める。

杏梨はすぐさま応じる。彼女はそういうことに長けている。

「お久しぶりです、主任。既にお分かりでしょうが、餘邊にかに霧江五樹が拉致されました。今は安全圏ですが、『those』の上層が動いたら窮鼠に陥ることをまだ彼女は分かつていません。そういうわけで貴女に力を貸してもらいたい」

「おいおい、おいおいおいおいえらく他人行儀だな、杏梨。半年会つていなかっただと言うのに。前みたいに『しゅにいん、頭なでなでしてくださいあい』って甘えてきてもいいんだぞ」

「貴女に一度たりともそんな妄言を吐いた覚えはありません」

「.....」

「言つてないって。そんな目するの止めて」

なんか物凄い扱いにくそうな人だということだけは分かった。これなのだろうか、杏梨が性格に難ありとか言つてたのは。

しかし今の私は茶番に付き合つてられるだけの余裕はない。敢えて毅然とした態度で臨む。私にはそれくらいしか出来ない。

「で 手伝ってくれるの？ そう杏梨が言つから私達ここまで来

たんだけど

「おつと、なかなか気丈なお嬢さんだな。霧江の眷属なだけある。ボクをしてその態度、それだけで賞賛に値するね」

「答えは？」

「まあそういう焦るな」

そう言つて、寿蓮華は私の前まで歩を進める。

そして眺める。私を。品定めするように。舐め回すように。『私が』が『何』であるかを見透かすよ」。

やはり彼女も……『知つて』いるのか。

これだけ完成された存在ならば……不思議ではない。

一秒、一秒、……………それ以上？

「…………ふうん、まあいいだろ」。丁度幻や松久のやつてゐる」とには付いてけなくなつてたとこだ。幻は幻だと何故分からん。……………ここで一つ、第三勢力を築くのも悪くないかもしれないな」

「兄さんを、助けてくれるの？」

「ん？ 君ら、それを嘆願するために来たんだろ？ ボクはこれでも年下の女の子の頼みは断つたことはないんだ」

また本当なのか嘘なのか分からぬ、飄々とした言動を見せ、茶髪のロングヘアをかき上げながら視線を杏梨に移す。

「杏梨、これでいいんだな？」

「はい。お願ひします」

「よろしく」

そう言つて寿蓮華は薄く笑みを浮かべる。

「やはり退屈は世界の敵だな。恐らく上層の位に居る者は誰もが思つてことだらう」

大仰な身振りで、教会の扉を両手で開け放つ。
視界が飛び込んでくる。そしてそれは今から私が身を投げ打つ世界だ。

「行こうか。ボクも参戦する理由が出来た

その39　追隨

追隨 12 / 6 i?

打ちっぱなしのコンクリート。
無機質。冷たさ。廃れ、土に還り、虚ろ。私も同じ。それも同じ。
月明かり。
寒風。

視線の先には対象があるだけ。
風が、強い。
ただ監視が今の私の役目。

「.....」

ああ、ノイズが心地良い。

ザ――ザ――ザ――ザ――ザ――

ザ――ザ――ザ――ザ――ザ――

ザ――ザ――ザ――ザ――ザ――

ザーザーザー――――――――

ザーザーザー――――――――

シ――――――――――――――――――――――――――――――

途中ですがニュース速報をお伝えします。

今日午後八時半頃、一十一階建てのマンション、『ヒルデガルト』にて爆発らしき爆音と共に火災が発生し、マンションは半壊、火災は現在も衰える様子はなく急ピッチで消火活動が続けられている模様です。現時点で入ってきている情報によりますと、死者三十二名、負傷者七十七名であり、署では遺体の身元確認を急いでいます。被害者の殆どはマンション周辺で被害を受けおり、まだ大勢の住人がマンション内に取り残されているとのことで、消防による救助活動が現在でも続いている。マンションは駅の最寄りに位置しており、現時点で判明している被害者の多くが帰宅途中の

「誰」

ラジオに耳を傾けつつ、椿彪つばなわあやは自分を見据える視線の主へと言い

放つ。

視線を投げかける行為は、姿を現すのと同義である。現に彪は相手の気配を完全に捉えていた。

それにここは切り離された空間だ。故に声を投げかけた相手に手加減は不要。そもそも自分に関係していい人物は餘邊幻と氏咲松久だけだ。彼ら以外のコンタクトは無意識の内に拒否しているし、その境界線を無粋にも乗り越えてきた者達には等しく死を与えてきた。当然ながら今回も例外ではない。存在を確認し次第排除にかかる予定であった。

一切の感情もなく、一切の情動もなく、一切の意識もなく そして一切の理由もなく、彪はこの瞬間殺意だけを全神経に行き渡らせる。

私の世界は私のものだ。邪魔などさせない。

反応は 果たしてあつた。

「こんばんは。良い夜ね」

声がした。高い声。幼い女の声。 嫌いな声だ。虫唾が走る。
だから ああ、殺そう。

方向。声量。座標確認。誤差修正完了。

彪は腕を伸ばす。認識したのなら、『掴む』のは容易い。この場

の支配権は徹頭徹尾、彪が握っている。

イメージ。狙いは首元。そのまま握り潰すのが望ましい。何にせよ、一部分でも支配下においた時点で百通り以上の破壊方法が既に動き出している。

だが

「…………？」

感触はない。

風が吹き抜ける。

感情は勿論表に出さない。しかし、自分という存在から滲み出る『色』はそうそう隠せるものではない。ましてやそれが、今対峙しているような相手ならば。

「乱暴なのね。初対面なんだから、挨拶くらいさせてくれないかしら？」

静寂を打ち碎くのはヒールから発せられる足音。暗闇から炎り出たように、彪の前には少女が立っていた。

赤と黒のドレスを身に纏い、黒く長い髪を大きなリボンで両脇に結えているその少女は、妖しく微笑む。

当然彪は無表情で返す。既に戦闘は開始している。

「改めてこんばんは、『天庭』の狗さん。私は紫子。^{むかうこ}二人で一人の紫子。突然で申し訳ないんだけど、貴女私に殺されるみたいよ」

穏やかだった瞳が紅に染まり、大きく見開かれる。

「ツ！」

彪は決して油断していなかつた。しかし、彼女には決定的にまだ場数は踏んでいなかつた。そのため、敵を無力化するために敵を確認し続けるという愚行を犯してしまつた。

それでも、『天庭』随一の反応速度を以てして、彪は紫子に詰め寄る。即断即殺。両者の間は五メートル強であつたが、手段を問わず殺しきるためなら彪にとつてその程度の距離は無に等しい。

身体中に三十三忍ばせている刃物。その中で右腕内側のそれを出現させる。

回り込み、首を絞め上げると共に刃物を滑らせる。それで絶命。

それで終わり。

だが、

「う……ッ……」

首に違和感。寸でのところで動作を止める。

その隙を見逃さず、紫子は彪の拘束から逃れる。

「あら、首がどうかしたかしら？」

嘲るような口調と共に、紫子はどこからともなく身の丈程ある鋸を取り出す。

馬鹿げた大きさのそれに彪が瞠目すると同時に、紫子はその鋸を振り上げ、片方の腕を落とす。

瞬間、彪の右肘に想像を絶する激痛が襲つた。

「ツツツ……」

「ア――――ツハツハツハツハツ…… どう!? 痛い!? な
らこれは!?!?」

だらしなく口角を上げながら、今度は本当に彪の右腕を切り落とさんと血飛沫を撒き散らしながら紫子が跳躍する。

腕を抑え悶絶する彪。

確かに自分は斬られた。それは明らかに次元干渉だった。『どこか』で確かに自分は斬られたのだ。『those』が相手であるならば、このくらいの攻撃は予想しておるべきであった。

彪は考える。考えるだけならば、時間を無限に伸ばすことが出来る。

そして結論付ける。普遍時間に換算して、一秒もかからない判断。

「あら」

重力に任せて振り下ろした鋸は、コンクリートに深い傷を残しただけで沈黙した。

紫子は眼を瞬かせる。

消えた。

いや、見えなくなつた、と言つた方が正確か。

反撃は こない。今のことには、人の温もりが微塵も残つていな
い廃墟独特の月明かりに浮かぶ埃のよつた切なさが渦巻いているだけだつた。

「…………ホントに逃げたみたいね。全く、もうちょっと遊んでく
れてもよかつたのに」

紫子は鋸を無造作に放り投げ、靡く髪を押さえながら虚空に目を
向ける。

「桜子。どうする？」

「…………当初の目的を忘れないで。彼女を殺すのは後。早く『天庭』
の0132支部を潰す活動に戻りなさい」

「ふふつ、真面目ね、桜子は」

夜は更ける。

そして日付が変わる。

動き出すものは、これを期に動き出す。

その40 猛追

猛追 12 / 6 i?

眼下には炎。それは決して消えることはない。自然に発生したものとは違い、意図的に発せられた炎は燃え尽きることはない。違ひは些細なことで、意思が有るか無いかの違い。

火は元々生物に対して畏怖を想起させるものであり、そのもの自体が既に原始本能に刷り込まれた『意味』としての役割を持つている。

だが、俺は美しいとは思わない。

かつて何もかもを奪い去ったものに対しても

「いつまでこんな不毛なことを続けるつもりだ？」

不毛なこと。それは俺が一番嫌うことだ。掘った穴を埋める作業を延々と続けるように、そこに実が結ばれることは永劫ない。

俺は今しがた火の海に沈ませた又迦己祓へと向かって、憐みを込めて宣言する。

可哀想だ、と思う。この程度でしか攻撃の術を持たないことに。そして呆れる。未だにアレラの居場所を突き止めることが出来ない己自身に。だからこのような不毛なことを続けざるを得ないのである。

「分かっているだろうが。俺とお前の溝の深さを。十年前何度も殺されたのか、もう忘れたのか？ たかが階層を数段下げたところで、俺の深みまで立ち入れるとでも思ったか」

すると、不意に両足に違和感。見ると赤黒く燃え盛る無数の繩が、脚の根元にまで絡みついていた。

鉄さえ溶かす高温に、皮膚が溶け、血液が蒸発し、骨まで焦がす。
そう。常人ならば。

「俺は『遊び』を好むが。『戯れ』は好きじゃない」

縄を手に取り容易く引き千切り、俺は行動を開始する。

不本意ではあるが、ここから一帯の生命活動を全停止する案を最優先事項に置く。あくまで俺が望んでいるのは同胞の平穏だ。正直言つて『この』世界の人間には殆ど興味がない。

炎縄を自分の支配下に置き、一振り。それだけで地上では大規模な爆破が起こり、爆風は数十メートル離れたこの上空にまで届く。同時、又迦己祓が眼前に姿を現す。その様子だと、もう転生した回数は両の手の指に余るだろうか。

「よう、楽しんでるか？」

両腕に焰を纏わせて、神経を逆撫でする声を上げる。

「その形でまだほざくか。俺は今機嫌が悪い。用件だけ言え」

「ん？　んー？　お前アレか。俺が標的なら関係無い人まで巻き込むなつつーアレか？」

「勘違いするな。そう思っているのなら、お前は無能だ。俺に余裕があるうちに質問に答えろ」

「つれねえな。こつして俺がお前に吹っ掛けてるんだ。行為から読み取るくらい、お前には容易いだろ？~」

「そういう意味じゃない。俺が苛ついているのは他でもない『現状』

だ

又迦己祓が現れた。つまりは少なくともあの三人以外は全員出払つたと考えるべきだろ？

月見坂愛。

円上神威。

皇周。

あの三人は別格だ。この次元に具象化するだけで、気配に気付かないわけがない。だが、異変は各地で起こっている。今この場でも、少なくとも三桁の人間が死んでいるだろう。ならば、もう変化は起こつてしまい、秩序は乱されたと考えるしかない。

「…………」

幻。アイツは今何を考えているだろ？

アイツの側には俺が居てやらないと駄目だ。あの日以来、『彼女』を失い狂人になつたあの日以来、幻には己を制御させる人間が必要不可欠なのだから。

それは『先』の戦いで常に隣にいた、俺にしか出来ないことだ。そして、『今何が起こつていてるか』。単純明白だ。だから俺は次の行動に移す。

「月見坂は何処だ」

「それは俺の口からは言えねえな」

「そうか。それならば。

行動分岐は定められた。

「そうか。うるさい。ああ、『つるさい』な。お前にはもう飽きた」

まだ話が通じる相手だとは思つていたが、そろそろ時間切れだ。以前とは勝手が違つ。今回は時間制限というものがあるのだ。

それに、『those』を壊滅させるだけではない。それよりも重要なやるべきことが、この混乱に乗じてやるべきことが、俺達には残つている。

『天』の遺産、霧江五樹の捕獲が。

そのためには、少し立ち止まりすぎたようだ。

「 ? 「

全てを包括する『円』が、俺を中心として空中に顕現する。『円』と言つ表現ながら、それは『円』に非ず。言つなれば『球』。もしくは『たゆたうもの』。便宜上三次元で空間を支配できるこの世界において、全てを包み込む絶対の法則。

だが、広範囲であればある程威力は落ちる。俺はそれを、注意を払いながら、しかし瞬時の内に収縮させる。どのように言つても、俺は無差別に人を殺す趣味はない。

範囲内に叉迦己祓を確認。

この時点では既に俺は捕らえている。形而上有つた『円』を形而下に降ろす。この時点で術式は完全に施行される。故に対象にも把握させられてしまうが、人間が空気を摑むことなど出来よづか。

「チツ！ クソガツ！－！」

ここに来てようやく異変に気付いた叉迦己祓が、俺に向かつて突進していく。

「 ? 「 ? ? ?

だが彼は俺に到達することは叶わない。無限の距離を走破するには、無限の速さを以て無限の時間が必要だ。彼には、まだその域に達していないのだから。

区域が限定されているという制限があるものの、世界を支配するということはこういうことだ。

そして真の強者は、自分より力の強い者と出会った瞬間に見極める力を持つ者であることを、彼は知らなかつただけの話。

「ハアアツ！」

だが、存外又迦己祓も『やる』方であった。
式を碎き、俺の元へと到達する。

互いの距離が零になる。

これには少し俺も驚いた。

全身から火の粉を迸らせ、巨大な鋏のようなものを具現化させる。狙いは軌道から察するに俺の五体を繋いでいる間接。単純。あまりにも単純。

「大鉢特摩・金剛嘴蜂！」

それでも、俺には届かない。あらゆる意味合いにおいて。

「 ? 「 ?

光。

砕け散つたものが、更に砕け散り、凝縮された光が瞬く間に『円内を埋め尽くす。

閃光があちらこちらで炸裂し、ついには収斂された光は爆発を起こす。

否、爆発という表現では生ぬるい、消滅が形を為して狂奔したような現象が辺りを駆け巡る。

「…………」

数秒後。そこあるのは、一般的な夜の静けさ。何事もなかつたかのように、月光が繁華街を照らす。

火は既に消し止められていた。と言つよりかは、アイツがいなくなつたせいで火に付随していた不滅性がかき消されたからだろう。ただの火はただの水に負ける。道理だ。

「さて……」

ひとまず幻の元に行くのが先決だ。又迦己祓の生死の確認はアイツらに任せておくとしよう。どうせカウンターでアレを食らつてすぐ動ける筈がない。

俺は携帯を取り出す。

「…………俺だ。少し用を頼みたいんだが
何？ 彪が？」

「そうか。そういうやり方か。…………分かつ

た、なら一時間後に」

俺は耳から携帯を離す。

俺は携帯を握り潰す。

俺は握り潰した携帯を放り投げる。

「何だ。結構やれるんじゃないかな」

かくして『天庭』と『those』は第一次抗争を迎える。

そして『彼ら』は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380w/>

畠辺ろにかは生きることにした

2011年11月27日19時58分発行